大

Œ

八

年十二月

刊

行

法 社 人團

癌

研

究

會

第十三年第四册 V.13

大

Œ

八

年十二月

刊

行

法 社 人團

癌

研

究

會

第十三年第四册 V.13



潮刻ヲ面ハ有結シノ團カ會コハノ謂相亦來メ夫界面ク見近 ニ下附人忽ス果ラ如體 、ナト夙生フラ 、既ニノノノ醫ル時 鑑ノ屬類諸ルヲ風キ互更ルヲニ物時捉此ニ命癌進多學へニ ミ緊セノニモ齎十意ニニモ悟癌學ハフ方執ヲノ運數者キ於 科要シ幸附ノシ並味國數ノリノ的内ル面心致如ハ學各モケ 學ナメ福スナ得ニヲ際年ヲ各如事科コノナスキ此者個ノル 近ル以ヲルリラ生以的前設方キ項外ト研ルモハ從カカニ自 時事テ進コ *學活テニ主ケ面大ニ対ヲ究研ノ古來相各匱然 時事テ進コ、學活テニ主ケ面大ニ科ラ究研ノ古來相各匱然ノ業癌メト然界。此聯ト完ノ問亙社得ニ索年來ノ會々シ科發ナ研ン能モ至質國絡シ備學題リ其サ向ヲタ宇研シ自カ學達ル究ガハ我大質際ヲテセ者ハテ他ルテ此其內究テ己ラノ ヲコノ爲サ邦ノ體的通獨ル相到甚各ハ盛方數ノ方提ノス進 移ト中ニルニ貢質共シ逸研倚底タ方蓋ナ面ヲ隨法携與 運 シ自央特ナ於獻等同ラ國究リー廣面シルニ減所ト研味其ハ テラ機ニリテヲニ研之ノ設テ學汎ノ痛援積セニ共究ト研頗 切明關國力を遂著究力學備其者ナ臨恨助ミス見ニニ自究ル ニナタ際 年ケシニ研者ノ共ノル牀之獎ラ ラ共從己益著 ラ的、々得き加究ノ下同孤領醫ニ劇夙其レ同事ノ々シシ性本本ル相盟ヲ主ニ研立城學過ヲニ人タ的ス專精キ 人リラ的 額、シ件 幸之メ質争病コ違セ進唱上究的ヲ科キナ其生ル研ル門ヲモ 福レ、ヲ邦ノトアンメニ記ヲ研占ニスセ疾ニ甚究カト加ノ ノ本又有於為必ルコンヨ各途究ム跨トル患及ダノ如ニヘア 上會同ステニセヲトトリ方ゲノルリ謂ノノホ酸緒キ從綴リニノ時ルモ鬼リ以ヲス萬面ンミハ、フ例本ス員亦ハヒヲ、利設ニ癌上籍、テ総ル國ノコヲ既其へ甚能悲ナ自頗互極從セ立治研記記の即其源ニ癌研ト以ニ研シタヲ惨ルラルニムツ ンヲ療究世登チ方シ至研索ヲラ知究。勘究ノ疾開稀相ルテト企匠会世、大方で ト企所會界ル本面來レ究ヲ企ハラ亦抑ナメ度患カナ離ニ其スラヲヲテモ邦ノレリ會分テ遂ル解モカン甚ノルルレ至基 ー スポーレッ智介ア逐ル所モカン甚ノルルレ至基ルルタ設設 ナー オール・ナ 着タニル 治癌 ラトタールモテレ 礎 吾ル立立な敷於究、而ルセリ其所組ナサ欲大ニヲノ其リ 等理シシル萬ケヲ蓋シモシ、本ナ織ルルシナシ見ナ作。蹈 微由最、_田ヲル積シテノメ即熊リ學疾ナタリテタリ業而メ 微由最、ルラル積シテノメ即態リ學疾ナタリテタリ業而メ 裏ニ新特代ラ研で我我開テチラ、的患リリ、、リキラシル ノシノ殊醫ズ究或ノ學セ究ニニニ項現然而レ計 然ミ從學 リキヲシル 。 `試テ醫 然:從學 ス蓋究設・國ハハ如者ラノ癌ス歐ノ時モシバニ ルタ來モ ルシ結備機家自比キニレ歩研ル米外/未テ泰徴 所國果ヲ無的ラ較ハ向爾武究期先化醫タ國西ス ニルノ亦 現モ醫輓 代ノ學近 外的應セ乗モ個宪来モ各進又キ諸的分十並研ニ ナ時用ル乗亦ノ上各先國メハモ國並科分ニ究之 ニニ的ノ 於シ研維 ラ運ス研、其價望國年ノ來稿ノニニヲニ社家レ ケテ究排 スノル究又研値外ニ斯研リ調ナ於各以其會ハカ ル各ハ甚 。風ハ所一究ヲノ比ク究シ査ルテ種テ真モ年為 學方多タ

癌 第十三年 第四册 • 目 次

本邦癌死亡者ノ統計的調査

矢田

耕 造…一九

第第 第第十九場八七 條條合條條 本會ノ資本を入って ノ員産評 〒年度ハ毎年一八次算ハ翌年ノ小 、次算ハ翌年ノ小 とい有價證券ヲ関 は、有價證券ヲ関 日總動レル 二會產又二 始ニョハ非 始マリ十二月三十一二於ラ之ヲ報告スペリアニアののでは暑若クハ確なののである。 リ関入ルルコトヲ倶ハ郵便官署若クハ確 ヲ確 **=**1 實 ŀ ナッ 銀 ス 行 三預ケ入レ之レヲ保管ス但

~ 3/

計 日 = 終 n Æ 1 ŀ ス

第 五章 員

第第十十 會員會 員ヲ分チテ左ノー ノニ 村 Æ , 2 內 外 國 人 ラ問 ハス 何 X タリトモ タル ŀ ヲ得

員

1

及壹千圓

以

Ŀ 7

ト員上ス 報員 指圖以上ヲ納ムアマハ特ニ本會, 1 7 事 iv 業ヲ 3 ŀ 贊 7 助 2 n Æ

3 ムル モノ 叉 八通常會員 ニシテ 滿十箇 年間

會

第第第 第 第十十十年十附十 六五 ス ルス ルシモテ ハ其旨本會事なり毎年金参圓ヲガ 事現ヲ 所所納 7 ス 届記ル 出ッへ會 事 ス 務所 = 申 込 ムへ

六章

セ

ント

Æ 1

出

會競裁 本會ニ左ノ役員ヲ置ク 一名 コ

內 理事 長一名) 頭

理副

大大大明

大正 六年四月改工大正三年二月法人登記人正三年二月法人登記

的及 事

第二條 無 本會 か スが傷ニ **一開スル研究所、** ガラ違っ、腐治を 究及研 N 為メ懸賞論文ヲ募集シ、癌研究所、。完ノ獎勵ヲ爲スヲ以テ目的トス 癌治療院ヲ設立シ又ハ學術集

定 療院、 學術集談會等二關ス ル規程 ハ評議員會 ノ決議ヲ ラ別 =

第三條 本會ハ社團 法人癌研 究會 ŀ 稱ス

事務所

第四條 本會八事務 所ヲ東京市 本鄉區本富士町武番地 武番地 二 置 夕

第 几

第五條 本會ノ資産ハ左ノ如シ南領以外ノ諸收入金南員ノ會費 ル資金

第六條 前條資産ノ一部ヲ基本金トナス

7

トヲ得

第三十四條第三十二條 本定款ノ變更ハ總會ニ於テ出席會員三分ノニ以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス、會ニ關スル規程ハ評議員會決議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム、會ニ書記ガー長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ從事ス書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ從事ス書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ從事ス書記ハ上長ノ命ヲ受ケ庶務會計ノ事務ニ從事ス本會ニ書記若干名ヲ置ク

ス

法 社 人 癌 研 究 會 役 員

富	高	木	細	長	土	本	益	缺
士川	木	村	野	典	肥	多	澤	
	喜	德		又	慶	忠	榮	-
游	寬	衞	順	郇	藏	夫	_	員
同	间	同	同	同	同	同	評議	監察
	學博		學博	本銀	學博	警馬博	員醫學博	
西	林	林	磐	井	伊	入	稻	森
山		1	瀨	上淮	丹	澤	田	村
信	春		雄	之		達	龍	開
光	雄	暉	-	助	繁	吉	吉	作
同	同	同	同	同	同	同	同	謹
醫學博士	2	啓季博士	整 學博士		警學博士	男學博士	醫學博士	A
田	吉	吉	金	大	岡	岡	遠	本
代	[ny	本	杉	森	田		山	田
6	爲	清	英	英	和	女		雄
義	久	太	£	太	-		椿	Ŧî.
徳	藏	郎	郎	郎	QIS.	聊	吉	郎
	士川游同西山信光同 警告田代 義	士川 游 同 西山 信光 同 se se 田 代 義 木 喜 寬 同 se se t 林 春 雄 同 音 吉 河 為 久	士川 游 同 西山 信光 同 SP\$P\$士田代 義 木 喜 寬 同 SP\$P\$士林 春 雄 同 SP\$P\$士吉本清太村 德 衞 同	士川 游 同 西山 信光 同 Senter 田代 義 村 徳 衞 同 Wester 林 春 雄 同 Senter 吉河為久村 徳 衞 同 Wester 吉本清太 輝 同 Senter 吉本清太	士川 游 同	士川 游 同	古川 游 同	喜 寬 同 警告博士 科 本 雄 同 警告 田 代 本

副會頭醫學博士

頭醫學博士

程事長醫學博士

醫學博士

副總裁

A

九 得會又理會總 頭ル事頭裁 副副 會ヲ理會總一頭得事頭裁名 11 11 監會評 事員議中員 中員 評ョ會評 議りノ議員総決員 八會議 會二二 頭於由 ノテリ 推薦ニュース 由舉戴 リスス

司長間ト 總 裁之ヲ Æ ス 佃 監

事

11 他

1

役

員

7 雏

ス 理 事 長、 理 事、 監事、 評 議 員 1 任 期 1 箇 年 F ス 但 滿 期 再 選 叉 21 再 嘱

=

缺

員

7

生

3

ルト

#

1

補

缺

選

舉

叉

11

証

2

4

第一第ラニルニナナコナ 者事 ト員期事 +會間及 ト評 11/ 之議ス議員 1 理ナ スル

四三 條條 事理評會會ヲ會 長事議頭頭得頭 事長員ハハ、 故ハハ會本補副 ア本本頭會缺會 ル會會ヲヲ員頭 トー樞補總ノ + 切要佐理任理 ハノノシシ期事 他會事會且八長 ノ務項頭總前 理ヲヲ事會任理 事處評故る者ノ テススル議残監 行フ 代

理 其 職 務

九八七六五 條條條條條 評總總定總 議會自總 會決招會評 議集小議 必ハハ毎員 要出會年會 ニ席報四ハ 應會又月東 心ショニ 頭過聞開於 之年者クラン ステ知會ク、 之書期、 決依時時 スツ宜宜 テニニ 以依リリリ 之依依リ 行變變 更更 スス IN IN 7 7

雜 則

原著

本邦癌死亡者ノ統計的調査

沙

第一緒言

總數/比較 二十歳以上ノ者/比較

第三 各國癌死亡者/狀況

第四 癌死亡者累年ノ狀況

比例 都市累年總死亡ニ對スル比例 と國都市累年人口比例 累年總死亡ニ對スル

第五 癌死亡者/男女別

累年男女別人口及總死亡ニ對スル比例 都市累年男

O矢田·本邦癌死亡者/統計的調查

陸軍二等軍醫正 矢 田 耕 造

比例 各國及都市男女別人口比例

女別人口及總死亡ニ對スル比例 男女別都鄙別人口

第六 癌死亡者/年齡別

例 都鄙別年齡別比例 都鄙別年齡別現住人口比例比例 各國年齡別人口比例 各年齡死亡中癌死亡比人口一般死亡者及癌死亡者年齡別比例 年齡別人口

米七 痛死亡者/罹患部位別

別年齡別現住人口比例 福患部位別有鄰鄉 在別年齡別人口比例 福患部位別年齡別人口比例 福患部位別人口比例 福患部位別人口都鄰別福患部位別人口比例 福患部位別百分比例

第八 癌死亡者/府縣及都市別

同 同 同 醫學博士 **梅季博士** 發學博士 草久栗宇 山 中鶴相 極 保本 濱田馬 間德 野 東 顧又 太東 次 磁 學學博士 醫學博士 醫學博士 木佐佐阿吾朝 近今 下藤藤久妻倉藤 達 津 正次三三勝文次 郎

評議員醫學博士 醫學博士 春學博士 譽學博士 樋 釀 宫 平 平 油田 山井 H П 謹

金政 之定 廣 次 藏 遒 重 叔 助 則

法人 唐 研究帝國大學醫學部病理學 市 本 鄉 mi 本 富 士 MI 學教室 ___ 番 會內地

下事 九務

第二 癌死亡者ト多發病類別死亡者トノ比較

依り明治四十五年、大正元年(以下之ヲ大正元年ト略稱ス)ヨリ大正五年ニ至ル五箇年(死因統計ハ本年 平均死亡數ヲモ揚グレバ左ノ如シ。 二月大正五年ノ分ヲ發行セラル故ニ以下此ノ五箇年ヲ「最近五箇年」ト略稱ス) ノ事實ニ付調査シ其ノ 癌死亡者ハ全死亡者ノ病類中多キコト第何位ヲ占ムル疾患ナリャ之ヲ死因統計ノ原因別(中分類)ニ

第一表 多發病類別死亡者表(白大正五年平均)

備考 整數以	位腦出	第四位腦	第三位 肺炎及	第二位 下痢	位	
T	血及腦軟化	膜炎	氣管枝肺炎	及腸炎	核	
リ第二表亦同ジ	六八七一三	六八、九六〇	八四、七二〇	一一二二三九五	一五二〇三	
		第九位		第七位		五年五
		癌	Ħ	畸	老	*
			1			
			疾			
		腫	患	形	Ř	
		三五、八四一	四一、〇七二		六〇、七六九	

一十歳以上ノ者ノミニ付其ノ序列ヲポムレバ實ニ左表ノ如クニシテ癌ハ第四位ニ上昇シ成年以上ノ者 益く其ノ惨害ノ甚シキヲ知ルヲ得ン。 上表ニ據レバ死亡病類中最多キハ結核ニシテ癌ハ第九位ラ占メ結核ノ約三分ノーニ達ス加之今若シ

第二表 二十歲以上多發病類別死亡者表 (同第一表)

第二位	第一位
腦出血及腳	結
腦軟化	核
六七、九三六	七四、七七四
第四位	第三位
稿	老
膧	袞
三五、八〇九	六〇、七六九

失田·本邦癌死亡者/統計的調查

亡人口、總死亡ニ對スル及痛死亡人口比例 都市別總死ル及痛死亡人口比例 都市別人口比例 都市別總死府縣別人口比例 南縣別總死亡人口、總死亡ニ對ス

職業別總死亡ニ對スル死亡比例 都市職業別總死亡

二對スル死亡比例

各月平均一日死亡比例 各月線死亡ニ對スル比例

第一 概 括

第一二 結 論

第一緒言

介原因未ダ闡明セラレザ 何人モ否定セザル所ナルベシ、 數三萬八千三百十五名ニ達セリ是レ癌死亡者ノ最少數ヲ示スモノニシテ事實ハ遙ニ之ヲ超越スベキハ 較シ又一、二之ヲ患者或ハ病理解剖的方面ノ調査成績ト對照セントス一讀ノ榮ヲ得パ幸甚、 內閣統計局編纂ノ動態統計及同死因統計ニ就キ調査セル是等ノ成績ヲ揚ゲニ、三之ヲ外國ノ事實ト比 ヲ受ケンカ其ノ大多數ハ貴賤貧富ノ別ナク數年ヲ出デズシテ死亡スルヲ例トスレバナリ故ニ余ハ以下 ノ關係ヲ知ルハ患者ニアラズトハ謂へ本症ノ研究上强チ無益ノ業ニアラザルベシ是レータビ癌ノ侵襲 實ニ就テハ此ノ兩統計書ノ外、 ノ兩統計書ハ各地方ニ於ケル死亡診斷書等ヲ本トセル調査ニシテ之ヲ診療セル醫師ノ技能千差萬別ナ 二於テ其ノ死亡數ハ減少セリャ否ャ又死亡者ノ累年二於ケル消長、男女、年齡、 腫い結核及黴毒ニ次デ人生ニ多大ノ慘害ヲ與へ統計上ニ現ハレタル死亡者サヘ大正五年ニ於テ總 ノ診断ニ正鵠ヲ誤レルモノアルハ発レザル所ナルベシト雖亦止ムヲ得ザルナリ是レ全國ノ事 iv 二七 サレバ特ニ研究會ヨモ設ケテ其ノ本態ノ探究ニ腐心セラル、 セヨー般醫學ノ進歩ト共ニ治療法ノ日ニ月ニ改善セラレツ、アル今日 モ賴ルベキモノナケレパナリ 罹患部位及府縣別等 サレド假 但シ上記

二、本表中佛蘭西ハ一九〇八乃至一一年、瑞典ハ一九一一年ノ事實トス

三、本表八人口比例多キ國ヨリ列記セルモノトス

亡者ノ人口比例ヲ揭グレバ下表ノ如シ。 ル瑞酉ノ約二分ノーニ相當シ最少國タル智利ノニ倍弱ヲ占ムルヲ見ル以下更ニ主要都市ニ於ケル癌死 上表ニ據レバ日本帝國ノ癌死亡者ハ少キモノニ屬シ二十四箇國中多キコト第十八位ニシテ最多國タ

第四表 各國主要都市癌死亡者人口比例(十萬比)表 (同第三表)

		八	七	六	Ħ.	四	Ξ	1	
	備考	ブタ	漢	巴	倫川	アム	維	伯分	1 2 2
非	一、本	ペスト	堡	里		ステ			N 1
質トス	表中マドリード	1011-4		一〇八	一	一一六十七	一二八・九	三三元	一大一・三
	八一九〇八八	一六	H.	pq	111	111		0	九
	万至 一	イプエノスア	彼得具羅土	シ ド ニ I	斯	リパプール	マドリード	羅馬	グラスゴー
	斯科八一九一〇乃至	八五·五	八五十六	九〇一	九四八	九六十六	九六。七	100·H	1011-1
	至一二年,	二四	1111	H	11	10	九	八	七
	彼得具羅土へ	カルカッタ	君土丹丁堡	チイラシイ	大、阪	東京	紐育	市俄古	费
	<一九一一乃至一二年		-11	pu	六一	六	七七	七八九	八五・三

二、本表ハ人口比例多キ都市ヨリ列記セルモノトス

上表ニ據レバ東京及大阪市ノ癌死亡人口比例ハ少キモノニ属シ二十四都市中多キコト第二十及第二

〇矢田·本邦痛死亡者/統計的調查

第三 各國癌死亡者ノ狀況

異ナルニ從ヒ其ノ發生數二多少アルベキヲ以テ左ニ診斷ノ適否等ハ之ヲ別問題トナシ統計上二現ハレ 如キ、又癌 ガ如キ、社會的階級ニ依り其ノ都會地ナルト僻地ナルトニ論ナク上流者ニ多ク下流者ニ少シト謂フガ タル各國二於ケル癌死亡者ノ人口比例ヲ揭グ。 癌ハ英國ニ在リテハ高燥ナル石灰地ニ比シ水分ニ富ミ 粘土ヨリ 成ル 土地ニ於テ 多發スト謂フガ如 肉食者ハ蔬菜食者ヨリ之ニ罹ル者多シト謂フガ如キ、咖啡茶ヲ多飲スル者ハ癌ヲ發シ易シト謂フ ノ多少ハ人民ノ貧富二比例スト謂フガ如キ換言スレバ土地、氣候、 人種、風俗及習慣等ノ

第三表 各國癌死亡者人口比例(十萬比)表 (至一二年平均)

	八	七	六	Ħ	四	Ξ	=		
此科	愛	H	諸	威英	瑞	蘇	和	瑞	
7		耳		w 関		格			
	関	蔓	威	爾斯 九七·六 一三 濠 洲 七四·三 二 玖	典	120	闡	西	
N KIN N								-	1
1	八一	八十	九五	九七	九八	0	0	二四	
7	•	-	*	九七。六	=	Ċ	py py	=	1
,									-
+ 4					_	and a			-
1	六	五	四	=	_		0	九	-
2	AT-	7	台	V.05	A	新	佛	地	1
7	1)-	ル	H	1396	忠	PE	1331	地	
7	利	7	養	洲	國	脚	西	利	
E	44.		34						
市呆人	L.	六	六	七	七	-1:	七	八	
双面上	Hi.	A da	六·北	<u></u>	24	H.	八。加	0	
止 売十		/	16		-6				
主生									A (10)
エフ		111	1		=	h	一八	七七	
L									2
ル。	智	古西	布	玖	钶	西	H	hn	3
ッファ		多利			牙	班		奈	
マン	利	hn	哇	馬	利	牙	本	阼	
氏等									
萬國	三	M O	M ()	24 24	四五	Hi.	六三	六三	
癌疾	* E/\	六	七	玖 馬 四四・六	ħ	•	-	六	
死									

館考 一本表の日本ヲ除クノ外米國ブリユテンシャル生命保険會社秘計主日エフ

計書ニ據ル以下外國ニ係ル統計皆同シ

第六表 各國累年癌死亡者人口比例(十萬比)表

七三・四	七五〇				一〇九·五		一 <u>五</u> <u>五</u>	七八·九	九一三	
100-11	七六・一	六四·七	110.0		一〇九・七	八五二	1011-11	44.0	一九一二	
六三・四	七四	六六·八	一二三十六	三. 五.	一〇八·九	八一七	九九・三	七四・三	九一一	
六七・七	七三・三	六五-六	二三三五五		一〇六・五	八三・五	九六・七	七六・二	九一〇	
六五・二	七二六	六四・二	一二六・七	一〇九・六	1011-111	七九九八	九六・一	七三・八	一九〇九	
· 六三·五	六九•六	六四·五	二二八〇	一〇七九	○三・五	七五・六	九三・三	七一・五	九〇八	
六七七七	七一·三	六一・七	- = = · 1	一〇六・五	10二十六	七六・一	九一・五	七〇九	一九〇七	
大大・〇	六四·三	六二·O	一二九〇	-10.0	10	七九十二	九二・二	六九·一	一九〇六	
五九。〇	六三・五	五八・三	一二九。五		〇二六	七四·八	八八九九	七一。四	一九〇五	
五四	*O.	北	一二八十六		九八·四	六九-三	八八十二	七〇・二	九〇四	
	六一五	五四	一二九七七	〇七・四	九九・三	六九·〇	八七一四	六八・三	一九〇三	
五〇八八	六四・二	五三・九	一二五九	1011-11	九五・二	六四·五	八四·六	六五・一	一九〇二	
31	六三・三	五二七七	一二七八	101.4	九三、八	六五•一	八四·三	六四·三	一九〇一	
四六二	六二・六	五二二二	一二九九九	九八八八	九一七	六〇・八	八二·九	六二·九	九〇〇	
ウルグアイ			瑞四	パワリヤ	和關	愛蘭	威英處斯及	合衆國	华次	
-			1	111		千世生な 男子 しっ	15/1/1			

上表ニ據レバ瑞西ニ於テ僅ニ減少セルノ外一般ニ年ト共ニ増加セルヲ見ル。

シ之ヲ其ノ他即チ鄙ト對照スレバ左表ノ如シ。 今本邦ニ於ケル人口五萬以上ノ都市(以下之ヲ單ニ都市ト略稱ス)ニ付明治三十九年以降ノ狀況ヲ示

O矢田·本邦癌死亡者/統計的調查

十一位ニ過ギズシテ最多タルコペンハーゲンノ約五分ノニニ相當スルヲ見ル然レドモ最少タルカルカ

第四 癌死亡者累年,狀況

ッタノ約六倍ナリ。

明治三十二年ョリ大正五年ニ至ル十八箇年間ニ於ケル癌死亡者ノ人口比ハ左表ノ如シ。

第五表 累年癌死亡者人口比例(十萬比)表

上表	同	同	同	同	同	明治
ニ據レバ	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	三十二年
本邦ノ癌死亡者	TO O	五三、八	五二五五	四七八	四四三三	四二·九
ハ明治四	同	同	同	同	同	明治
十三年	四十三年	四十二年	-	四十年	三十九年	三十八年
及大正元年二	六三・一	六三・六	六〇・六	五七・一	五六・六	五四八八
於テ僅ニ						
前	同	同	同	同	大正	明治
年ョ	·Æ	四	Ξ	=	元	四十
リ少キ	年	年	年	年	年.	四年
ノ外、年上共	六九•四	六七·五	六六•七	六五·七	六四二	六四五

リ此 加シ明治三十二年ニ於テ人口十萬比例四二•九ナリシモノ大正五年ニハ六九•四ニシテー倍半强トナレ 世醫術ノ進步ハ其ノ診斷ノ漸次正確トナリシコト與テ力アルハ勿論ナリトス、サレド前記 1 11: | ノ増加ノ原因ハ余ノ淺學茲ニ之ヲ説明スル能ハズーニ先輩諸賢ノ垂教ヲ乞ハントスル所ナルモ近 歩ハ一方此ノ死亡者ノ減少ヲ來タスベキニ拘ラズ尚且ツ増加セルハ之ヲ診斷ノ正鵠ニノミ歸 in だ如シ加之本死亡數ノ増加ハ獨リ本邦ノミナラズ各國共ニ其ノ軌ヲ一ニセリ卽チ左表ノ如シ。 ノ如ク醫術 增

照セパ左表ノ如シ。 ドモ都市ノ明治三十九年以降ノ全平均ハ倘遙ニ鄙從テ全國ョリ多シ以上ヲ每五箇年ニ輯約シテ之ヲ對

第八表 都鄙別每五年癌死亡者人口比例(十萬比)表

			同四十	石		
上據	Œ Æ	ha	一四乃至士	+		
110	A.		主大工	九乃至四十二		
都市ノ	年	數	大正四年	生年		
人口比	六		六	六	全國都	
例	九。四	五五	五七七	0	130	
鄙從テ						
全國人	六六・七	三七	六七・二	六三·五	都	
比例						-
ヨリ多	六九·八	六・〇	六五·六	五九。六	點	
シ然レ			*		, 1	4
F T	\subseteq	\equiv	$\widehat{\pm}$	$\widehat{\pm}$	多國	1
後五箇年ノ増加率ハ却ラツ	二七	六	Ī	111-111	鄙 ・ 全國ニ對スル都 翌	
牛ノ					A0 11010	
增加率	\equiv	\equiv	+	÷	多(十)小	
キハ却	-	1-11	- - 六	三九	多(十)少(二)	
ブル						

ノ約三分ノニニ相當スルノミ加之最近ノ大正五年ハ人口比例ニ於テモ少シ。 少ク鄙

各國ノ都市ニ於ケル狀況を亦左ノ如クニシテ多少ノ增減アリト雖各國共ニ追年增加シ三十餘年ニシ

第九表 各國都市累年癌死亡者人口比例(十萬比)表

會利

テ五分ノ四内外ヲ増加スルヲ見ル。

一八八四	一八八三	一八八二	一八八一		
五〇.	四六·九	四八〇	四九·六	二十都會加	
六一一	五九、八	五八·六	五七三	十都會 十五都會 千以上/市英 吉 利 獨 逸 佛蘭西人口	C
八〇二	七三五五	七五五	七二・二	十獨五都會強	1
				件関西人口五	1 1 10 10
				七伊都太	

第七表 都鄙別累年癌死亡者人口比例(十萬比)表

上表	平	同	同	同	同	大正	同	同	同	同	同	明治	
上據		Ł	四	=	=	元	四十	四十三	四十二	四十一	四十	三十九	
V	均	年	年	华	年	年	四年	年	年	年	年	年	
バ都市ノ													
癌死亡ハ	六三•六	六九·四	六七·五	六六-七	六五·七	六四・二	六四·五	六三・一	六三-六	六〇・六	五七。一	五六・六	全國
鄙。比													
鄙二比シ多ク從テ全國ノ事實ョリ	六五·五	六六•七	六七・一	六六•九	六五·三	六八・一	六八•六	六四·七	六五六	六四·三	五九・七	六二・八	都
ア全國		,											
事實ョリ	六三・二	六九·八	六七.七	六六•九	六五·七	六三·六	六三・九	六二・九	六三-三	六〇-1	五六・三	正	鄙
モ大											0		多鄙
然	÷	3	=	3	3	\pm	£	\pm	÷	÷	÷	÷	十對小公
ナリ然レドモ	1-11	110	0.六	1	O.	四五	四五	六	ī	二	-	七三三	多(十)少(二)
大正													

鄙ヨリモ減少シ同三年ハ同率ナルモ以後ハ共ニ少ク五年ノ如キハ十萬比鄙ヨリ三・一全國ヨリニ・七少 再ピ増加セルモ其ノ數少キニ依ル之ニ反シ鄙ハ明治四十三年及大正元年ヲ除クノ外毎年増加セリ然レ シ是レ都市ニ於ケル癌死亡人口比例の明治四十四年ヲ頂巔トシ翌大正元年ヨリ漸次下降シ四年ニ於ラ 正二年ニ至リテ

九六二				した。三	ルー三
		一九三	一〇六·九	八五。四	九二二
		一七.五	一〇二·九	八三。四	九一一
		一一六・八	一〇三九	八二九	九一〇
		一四。八	一〇三・六	八〇八	一九〇九
	100.4		-00八	七七九	一九〇八
	九九。四	一一七八	九七・四	七八·九	一九〇七
	100·PF	一一三九		七五九	一九〇六
	九七・三		九四・七	七三・四	一九〇五
	九四十六	1 1 111-111	九三・五	セー・	九〇四

以下更二各國ノ每五衛年二輯約セル成績ヲ揭グレバ左ノ如シ。

第一〇表 各國每五年癌死亡者人口比例(十萬比)表

死亡者ノ逐年其ノ數ヲ増	八四二	tt.t	七〇八	逸
以上列記セルガ如ク癌	一三七三	一二九。一	一八九九	抹(都市)
,11	九六十六	九四・九	八五・七	NE
	七八・八	六八·五	五八。一	140
外各國共二追年曾加セル	九九十七	八四·八	七七。一	格蘭
ク癌死亡者ハ瑞西ヲ除ク	九四〇	八六。七	八〇・一	版
上表ニ依レバ旣記ノ如	一九〇六—一九一〇	一九〇一一九一〇五	一八九六—一九〇〇	

O矢田·本邦癌死亡者/統計的調查

5

九〇三	一九〇二	九〇一	九〇〇	一八九九	一八九八	一八九七	八九九六	一八九五	一八九四	一八九三	一八九二	一八九一	一八九〇	一八八九	一八八八八	一八八七	一八八六	一八八五
六八·四	六六-入	六六・七	六四·〇	六二・七	*O	五八:二	五八	五七二二	五四・〇	五四二	H. H.	五四・七	五四九	四九	四九。七	<u>=</u>	四八二	四八:三
九四・七	九二、四	八六、八	八八。〇	八八〇	八五:二	八四	八〇八	七八・八	七五〇	七三・九	六九•七	七二.0 .	433-11	六八・七	六六・七	六五·九	六二・三	六一•六
	一〇六・四	一〇五・三	10三十	一〇九・〇	1011-1	1011-111	一〇一九	00.00	九二·九	九二・一	八八八四	八七二	八四·九	八六〇	八二・七	八〇一四	八一七	七六八
九二·四	八九九八	八九九九																

度益く 等 實へ人種、 衛生法ヲ重ンズル結果トシテ比較的長命ヲ保チ癌發生ニ好適セル年齡ヲ容易ニ迎フル者多キヲ致セ 7 上流八士ノ間飽餐暴食ノ徒漸クニシテ多キヲ加フルモ亦此ノ蔓延ヲ促スナキヲ保センヤ」 日ク「癌ハ各國日ヲ追フテ増加セリ之レ外見上ニョリ診断確實トナリ 且病理解剖ノ數ヲ 加へ又各人ノ 食性ノ南方人民及草食動物ハ癌腫ニ罹ルコト稀ナレドモ 肉食動物ハ之ニ 罹ルコト 多シト 三輪博士ハ 也 " 因 種々ナル原因 即于過度ノ肉食ハ多量ノ尿酸ヲ産生シ之ガ組織ノ刺戟トナリ從テ本病ノ發生ヲ催スモノニシテ疏 離スル地方アリ英國二於ラモ癌患者二限リ特定ノ病院アル地方アリト謂フモーレー氏ハ「生活ノ 高ヶ衛生法愈、行ハルルニ従ヒ本症ノ發生ヲ増加ス」ト謂ヒ或者ハ之ヲ肉食ニ原因 ルモノナランカ。 = 土地、 基クモノナラン其ノ他社會ノ進步ハ肉食者ノ數ヲ増シ剩へ多量ノ鯨飲家ヲ生ジ就中 職業及ビ生活狀態等ニ依ラ説明シ得ベキモノアルベシト雖亦以ラ癌腫増加ノ ト此等 ス ルモノト 事 n

以下更ニ總死亡ニ對スル癌死亡者ノ比例ヲ揚ゲ全死亡者中其ノ幾何ガ癌腫ニ因スル者ナリヤヲ示サン。

ヲナセ

第一一表 累年總死亡ニ對スル癌死亡比例(千分比)表

	同	同	同	同	明治
0 元日・大市省	同三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	但三十二年
つ 年日・大事権を記す、 むとか問む	二六·九	三五二	三三五	二六	110·M
	同	同	同	同	明
	四十二年	四十一年	四十年	同三十九年	治三十八年
	二九一	二九。〇	二七。四	二八·六	二六·O
	同	同	同	大正 元 年	明治
	四		=	元	四十
	年	年	华	年	年
	三三一六	三二十六	三三六	111-111	三六

(今日・オ事報をです)報言が記述

数ヲ増加セ	ニシテ古來	スルモノナ	ク長時潜伏	其ノ所見ハ	ルー小地域	ン、スチッケ	委員會ノ調	リト又輓近	ノ増進ニ從	В	總平	佛蘭西(都	伊太	甸牙	樂地	瑞	和
リ是レ白	亞弗利加	ラント想	シテ其ノ	癌ノ人ョ	三付調査	ル氏ハ人	査ニ依レ	ノ研究ニ	ピラ悪性	本	均	市	利	利	利	西	謝
1人ヨリ 感染スル機	加ノ黒奴い福ヲ發生	心像セリ、其ノ他交	生活ヲ保ツコトハ	リ人ニ直接傳播ス	立シ該地ノ或ル一區	口ノ増減著シカラ	バ癌患者總數ノ一	依レバ癌腫ノ傳染	腫瘍漸ク増加シ癌		六九•一	九七二三	五〇九	三〇七	六八·九	二二七。四	九一九
會多キニ因ルモノ	スルコト少ナク亞	通ノ發達人口ノ稠	實驗的ニ證明セラ	ルコトラ示スモノ	域二於テ癌ノ多發	ズシテ且八十年來	四・三%ハ證明スベ	二依テ發生スルハ	腫ノ比較的死亡數	五二・六	七四十二	九二。一	五五二	三九・一	七四·七	一二八・三	九七六
ナリト又佛蘭西國	米利加ノ黒奴モ初	密等い癌ノ發生ヲ	ルルガ故ニ癌ハ傳	ニシテ癌細胞ノ恰	セルト屢く或ルー	ノ死者ノ原因等ニ	キ傳染二依リテ	往時人ノ信ジタル	ハ五十年前ニ比ス	**O-=	八一〇	101.4	六三・六	四三十六	七八・三	一二五九	103.H
ニテハ癌ヲ傳染病ト認メ之	のメ癌腫少カリシガ現今其ノ	増加スル傾向ヲ與フルモノ	染後數年ヲ經テ初メテ現出	モ胎生時轉位セル細胞ノ如	家族中二多發セルトヲ見テ	於ケル詳細ナル記事ヲ有ス	發生シタル者ナリトアント	ヨリモ多數ニシテ獨逸癌腫	レパ近時四倍ノ多數ニ上レ	レバ英吉利ニ於ラハ資産	ル、ウャルリャム氏二依	種々ノ朝色フリフ	T. T. T.	スル理由ニ刷シテハ	見ル然り而シテ癌腫ノ増	各國其ノ執ラーニセルラ	加セルハ瑞西國ヲ除ク外

同	同	同	同	大正	同	同	同	同	同	同	同	同	同	刷	同	同	
五年	四年	三年	二年	元年	四十四年	四十三年	四十二年	四十一年	四十年	三十九年	三十八年	三十七年	三十六年	三十五年	三十四年	三十三年	
4:0	六六	六、八	六・七	六・五	六.五	六。四	六。四	六一	五七	五七	五五	五	i.	# <u>.</u>	四、七	M.	
六·九	六七	か・六	六四	六四	六四	か・三	六	小。 ・	五七	五·六	五。四	五。四	五。四	五三	四。九	四五	
11111111	三三六	三二七七	三四·四	三二五	三一六	10·11	二九。四	二九〇	二七·五	二九・二	ニナ・ニ	二六八	二六八	二四六	11111-1	ニー・六	
111-111	1111·11	三三五	111-111	1111-1	三十七	二九九八	二八六	二九十一	ニキ・ニ	二八二	二五七	二六•四	□4·O	二五六	二三·九	1111-1	

○・二多カリシモ以後ハ却テ男ニ於テ○・一乃至○・三多キコト多シ總死亡ニ對スル比モ最初ノ五年及 上表ニ據レバ癌死亡者ノ男女別人口比例ハ 明治三十三年乃至三十五年ニ於テ 女ニー萬比○•一乃至

O矢田·本邦癌死亡者/統計的調查

是レ 比例モ殆ド年ト共ニ増加シ大正五年ハ明治三十二年ニ比シ人口比例ト等シクー倍半强トナレルヲ見ル 如クニシテ全國ニ比シ常二其ノ數多ク彼ノ一倍华ニ達セルコトアリ然レドモ増加率ハ全國ノ如ク著明 ナラズシラ大正二年以降ハ却ラ一般ニ遞減セリ、 上表ニ據レバ癌死亡者ハ總死亡者ノ二〇乃至三四%ヲ占メ人口比例ノ増加ト等シク總死亡ニ對スル 總死亡率ハ特ニ逐年増加セザルニ對シ癌死亡ハ追年増加セルニ依ル但シ都市ノミノ狀況ハ左表ノ 明治四十三年 サレド都市ハ死亡率全國ヨリ少キヲ以テ死亡例ハ尚 110.0 明治 五 年 111-11

第一二表 都市累年總死亡ニ對スル癌死亡比例(千分比)表

ヨリ多シ。

同	同四十一年	同	明治	
四十	四十	24	三十	
40.	金	十年	九年	
7-		•		
11	=	=	=	45
=	三一九		四	-
				1
				1
同	大	同	明	A ST. W.
	IE.	py	治四	7 992
_	元	十四	十三	7
年	年	年	年	1
				41.0
三	三	三五	三四四	,
六	九	•	=	7
				I
				-
	大正 元 年 三六·九 同 五 年	同	大正	
	£	24	==	
	年	年	年	
	=	==	=	
	24	ni.	三五。二	
	0	h.	-	

第五 癌死亡者」男女別

死亡者!狀況果シテ如何、左ニ男女別人口比例及男女別總死亡ニ對スル癌死亡比例ヲ揚ゲン。 從來ニ於ケル臨牀及病理家ノ統計ニ依レバ癌ハ概シテ女ニ於テ男ヨリモ之ニ罹ルコト多シト本邦癌

第一三表 累年癌死亡者男女別人口及總死亡比例表

男男 男 公本	The state of the s
西女	7
想化し二對スル	
第一 コー・ コー・七 コー・七 コー・七 コー・七 コー・カル 極化亡干分比例	

明治三十二年

			總死亡人口一萬比例	癌死亡人口	一萬比例	癌死亡二	福死亡千分比例
			男	男	女	男	女
三十六年	全		二〇-六	四六	四九		二三九
+ .	全		二〇-六	五七	五十六		二七三
四十一年	都	市	一七九	五九 六七	六・七	三二一四	三二八
四十二年	全		二〇.六	六·五	六・四		1111.1
大正二年	都		一八・三	六•三	せ・○		三五三
止三年	全		二〇九	六九	六・七		三二・七
主五年	都		一八六	六·四	+ · · ·		五五五

備考 明治三十七年乃至四十一年ノ都市ハ明治三十九年乃至四十一年ノ三箇年ニ於ケル平均トス

其ノ差モ全國ニ於ケルモノヨリ大ナリ而シテ總死亡者ニ對スル癌死亡者ノ千分比例ハ癌死亡率ト殆ド 十九年以降ノ男女別人口比例ヲ調査セルニ左表ノ如シ。 者ノ人口比例ハ全國二於テハ僅二男二多ク都市ノミニ於テハ女二稍と多シ今更二都鄙別トナシ明治三 多少及增減ヲ共ニスルヲ見ル是レ總死亡率ハ累年僅微ノ差アルニ止マルニ依ル要スルニ男女別癌死亡 ル、サレド其ノ差少ク殆ド同數ト謂フモ可ナリ之ニ反シ都市ノミノ癌死亡人口比例ハ常ニ女ニ多ク且 リ少キニ拘ラズ却テ僅ニ男ヨリ多カリシヲ除クノ外、常ニ總死亡比例ト一致シテ少シク男ニ多キヲ見 上表ニ據レバ全國ノ男女別癌死亡者ノ人口比例ハ女ニ於テ總死亡人口比例最初ノ五箇年少シク男ヨ

第一六表 癌死亡者都鄙別男女別人口比例(一萬比)表

〇矢田·本邦搞死亡者/統計的調查

明治四十一年二於ラ千分比○・一乃至○・八女二多カリシノ外、男二於ラ○・一乃至一・○多シ但シ都市 ノミノ狀況、左表ノ如クニシテ癌死亡者ノ男女別人口比例、常二女ニ多ク其ノ較差モ稍、大ナリ。

第一四表 都市累年癌死亡者男女別人口及總死亡比例表

	第一见 第	癌死亡者人口一萬比例 線死亡ニ對スル癌死亡子分分 一旦 オーギ 丁 りな 州 み ビ オリフラ ノー リ 糸 み じよ 作 オ	總死亡ニ對スル	線死亡三對スル痛死亡千分比例
	男	女	男	女
明治三十九年	五九九	六七	三重二	三四二
同四十年	五・五	六•五	∃1.0	三 - 四
同四十一年	五九	4.0	= -0	三二・八
同 四十二年	六・二	±-	三六	三二五
同四十三年	六•	六九	= PH - = =	三四・三
同四十四年	六·五	七二	三四·六	三五。七
大正 元 年	六五	セ・ー	三六。四	三七五
同 二 年	六-二	六•九	= 1. =	三六・四
同三年	六-三	4.	三四・五	三五九
同四年	六•五	せ・	三四·七	三六一三
同 五 年	六。五	六•九	明明七	三四·三

第一五表 每五年男女別總死亡及癌死亡人口比例表

左二以上二表ノ事實ヲ總死亡比例ト共二五箇年每二輯約シ之ヲ比較セントス。

否ヤヲ研究スルノ要アリ然レドモ都市ノミノ年齢別人口ハ警察署ノ調査ニ係ル現住人口ノ外、知ルバ 多ク女ハ都二多キ原因ハ職業及生活狀態等ノ差ニ歸スベキャ將タ他ニ理由ヲ有スルャ詳ニ之ヲ知ル能 ハズト雖本症ノ如キ年齢ト大關係アル疾患ニ就テハ其ノ住民ノ組織的關係即チ年齢別人口ニ差ナキャ キモノナキガ如シ故ニ今假二之ヲ引用シ大正二年十二月末日調ノ全國及都鄙別年齡別人口ノ干分比例 シテ對照スレバ左表ノ如シ。

第一七表 都鄙別現住人口年齡別比例(千分比)表 (大正二年)

		男			女	
	全國	都	鄙	全國	都	鄙
〇一五歲	1 = 1 = 1		一三三。四	二二九。一	一八二	- = O. E.
五一〇歲	一二三六	九九。四	一五八	一	1000-11	1 1 11.
一〇一一五歲	一〇七・九	九九	一〇九・一	10%-1	九五・八	-0t-
五一二〇歳	九五・五	1 • 1	九三・三	九五。八	一〇六・四	九四
二〇一二五歲	七七九	九二	七五。九	八二六六	1011-11	八〇
二五一三〇歲	七四	九一三	七一六	七四五	九三・〇	七二·
三〇一三五歲	七二	八五。四	六九・一	七二・二	八二八八	六九·六
三五一四〇歲	六六・九	七七十六	六五·五 五	六五·四	七二六	六四
四〇一四五歲	五三・九	五九。四	五三	£ :-	五四八八	五一八八
四五一五〇歲	<u>=</u>	五三。〇	五〇九	四八、四	四七一四	四八
五〇一五五歲	三七九	三三九	三八三	三六・七	三一七	三七一四
No Harrison		200				

〇矢田·本邦癌死亡者,統計的調查

上表	a		F		福		F		i ii		沙	1	
據	7	1	7		一十二年		7	-	7	+	1	L	
レバ男	都	都	部	都	都	都	新	都	影響	都	都	都	
ニ據レバ男ハ明治三十九年、	六·四五	六·五四	六・四〇	六·〇九	六·四八	六・一九	六・〇七	五九四	五·六八	五五三	五·六七	五九〇	男
十九年、	六・三二	七二二二	六一八	六·九二	六一八	七〇八	五·九五	₩.00	五·五八	六·四九	五四三	六・七〇	女
四十四年及大	W1.0(1)	(十)〇·六九	111110(1)	(十)〇八三	(I)O·IIIO	(十)〇·八九	(二)〇七五	(十)一・〇六	(1)0.10	(十)〇·九六	(1)0.11	(十)0.八0	多(十)少(二)
T.L.													
元年	2	k	ı	司	ħ	1	1	訓	F	司	7	k E	
正元年ヲ除	2	Ę.		司		4		11	E -	司二		k E	
正元年ヲ除クノ外		中 句 都	3		P		3		-	司二年都	5		
十四年及大正元年ヲ除クノ外、都ヨリ	1	9	3	Li F	4	y F	3	=======================================	4	=======================================	3	ic F	男
都	鄙	9 都	製	五年都	4	平都	- A	三 年 都	w w	手都	4	心本都	男女
	二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十	自都 六·一九	都 七一一	五年(都 六•四六	都六九二	四年(都六三八	る。一部六八四	三年(都 六・三三	本・八〇	二年(都 六十一九	部 六.四六	龙 本都 六·五〇 七·一	

○六、乙ハ○・一三乃至○・七五ニ達シ十一箇年ノ平均上、都ハ女ノ多キコト○・七七鄙ハ男ノ多キコ 萬比○・六五ニ達シ女ハ常ニ鄙ヨリ都ニ多ク其ノ差多キハ○・九ニ達シ十一箇年ノ平均上男ハ鄙ニ○・ ト〇・二四ニ達ス要スルニ全國ト都トノ 比較ニ 同ジ只其ノ差ノ稍~増加セルヲ異ニス而シテ男ハ鄙ニ 二五、女ハ都二○・七六多シ又都ハ常二男ヨリ女多ク鄙ハ常二女ヨリ男多ク其ノ差甲ハ○・四四乃至一・

第一八表 十五歲以上都鄙別癌死亡者現住人口比例 (一萬比)表 () 至大正四年平均

器	都	全	
上川とう	市	國	
一〇七	一〇九	(1-01)中01	男
一〇。		一〇・二(九・九)	女
舌瓜りへは普入コニオト反義以上ノ省ヨリ寛出セル人口セニシテ現在人口ニー・七 一〇・1 一〇・2 一〇・四 (一)(·	10.五(10.0)	計
(二) 〇六	(+) ()•	(二) 〇・五((二)〇・二)	多(十)少(二)

ヲ現ハセルモノトス

ス者ナランカ尚是等ノ現象ヲ呈スル原因ニ就テハ年齢別及罹患部位別調査ニ於テ更ニ記載セントス。 キハ其ノ原因何レニアリャ職業、 | 鄙ニ於ラ都ヨリ多カリシハ住民ノ年齢別人口ノ差異ニ基ク結果ナリト謂フベキカ又都 各國及一、二都市ニ於ケル男女別人口比例ヲ揚ゲ此ノ狀況ヲ見ン。 上表ニ據レバ男女共ニ癌死亡者ハ都市ニ多ク鄙トノ差、男ハ少キモ女ハ稍~多シ故ニ上記ノ如ク男 生活狀態ノ差異等與ラカアルベシト雖診斷ノ確否モ亦其ノ一部ヲ為 ノ鄙ニ比シ多

第一九表 各國及都市癌死亡者男女別人口比例(十萬比)表

矢	地			
田	利	本	聯	
小邦癌死亡者/統計的調査	地 利 一九〇九—一三	本一九〇八一二二		調査年
		六三・五	一〇六十六	男
	2			
	七三二	ガニ・入	一〇六・二	女
	(1)	(E)	(=)	多(十)小
	11-1	0.4	0	多(十)少(二)
11				

	合	九五歲以	九〇一九五	八五一九〇	八〇一八五	七五一八〇	七〇一七五	六五一七〇	六〇一六五	五五一六〇	
	計	Ŀ	践	改	歲	蔵	識	識	哉	哉	
	100000	0	0.11	·o	三、六	六八		11111-111	11.1.11	三八·五	
	10000.0	0.	0.11	0.11	一-七	11-11	せ・三	一四・七	三三.四	五五一六〇歲 三八・五 三二・二	
	100000	0.	0.11	•	三九	七三	四九	二四・五	三二一四	三九・三	
	100000	0	0	- H	1 .	八七七	ーナ・ー	二四・七	三一・八	三九・三三七・八	
3	00000	0.	0.=	0.*	11-11	五五五	10.七	一七八	二四·五	三一九三八六	
	100000	0	· 1	一・六	16 ·	九一	一六九	二五。六	三二七七	三八・六	

十歳ノ者、女ハ十五乃至四十五歳ノ者都市ニ多ク各其ノ以上ノ年齢者ハ再ビ全國及鄙ニ多シ要スルニ 定シ明治四十四年ヨリ大正四年ニ至ル五簡年ニ付癌死亡者ナキ十五歳以下ノ人口ヲ控除シ十五歳以上 都市ノミノ住民ハ少年及老年者少ク壯年者多シ故ニ先が大正二年十二月末ノ現在人口ョ中心人口ト假 シ三八・八鄙ニ對シ四四・三、女ハ全國ニ對シ三三・○鄙ニ對シ三七・三%ナリ之ニ反シ男ハ十五乃至五 シ三一四・○%女ハ全國ノ三四七・二鄙ノ三五一・五%ニ對シ三一四・二%ニシテ其ノ差、男ハ全國ニ對 本籍人口ニ係ルモノナルノミナラズ都市モ大正三年ニ於ラ其ノ數ヲ増加セル等ノ事實アルガ故ニ其ノ ノ者ノミニ對シ癌死亡者ノ男女別人口比例ヲポムレバ左ノ如シ但シ人口ハ現在者ナルニ對シ死亡者 上表ニ據レバ男女共二都市ハ十五歲以下ノモノ甚ダ少ク男ハ全國ノ三五二・八鄙ノ三五八・三%ニ對

トス之ガ爲ニハ各國ノ人種、氣候、風土及生活狀態等ノ外、旣記ノ如ク國民ノ男女ニ對スル年齡別人

口ニモ注意セザルベカラズ。

ハー局部ノ観察ニ止マルノミナラズ住民ノ男女敷ト對照セルモノニアラザルヲ以テ其ノ價値甚ダ少ク 左ニ病理學ノ方面ヨリ調査セラレタル患者ニ對スル男女百分比例ノニ、三ヲ記サン然レドモ本成績

只一部ノ参考ニ費センノミ。

石橋—鷹津	Steinhaus	Buday	Rieck	Borst	報告者
五五二三	四七五〇	四八・三六	三六・七〇	MO.00	男
四四·八七	五二・五〇	五一、六四	六三・三〇	4.C.OO	女
(1) 10.114	(+) £.OC	(十) 三:二八	(十) 二六·六〇	(+) 110.00	多(十)少(二)
	五五。一三四四。八七	五五十二三 四四八八七	四八·三六 四四八七 五二·六四 五二·六四	五五·二三 四四·八七 五二·二〇 六三·三〇 二六·五〇 五二·六四	Borst 四〇・〇〇 六〇・〇〇 (十) 二〇・〇〇 Rieck 三六・七〇 六三・三〇 (十) 二六・六〇 Buday 四八・三六 五一・六四 (十) 三・二八 Steinhaus 四七・五〇 五二・五〇 (十) 五・〇〇 日本 五二・五〇 (十) 五・〇〇 日本 (1) 一〇・二六

儒考 本調查八石橋、鷹津兩氏ノ「癌腫ノ統計的研究」ニ據ル

更二本邦ノ患者ニ對スル男女別調査ノニ、ニヲ記サン。

飯場實。	阿部賽夫	報告者
六一·〇九	六二・六七	男
三八九一	三七.11111	女
(1) 1111-1	(二) 二五:三	多(十)少(二)

備考 本調查八「癌」第一年第二册及第十年第一册二據ル

以上二表ニ據レバ本邦ノ報告ハ共ニ男多ク他ハ共ニ女多ク既記ノ成績ト一致スルヲ見ル然レドモ日

〇矢相·木邦癌死亡者/統計的調查

組	綸	東	合衆	7	新 東 東 東 斯 及 威	伊太	愛	ウルグアイ	端
育	敦	京	國	ヤ	及威	利	INI	アイ	西
		the contract of the contract o		一九〇五〇		一九〇八一一二		一九〇七一一一	九〇六一一〇
六二六	104.	六〇・六	五七.七	九九。四	八六・四	五八·五	七六九	七三:11	一二六十六
·le		4	·		10	4:	Ä	Tí	4 11
九一・五	一六三	六九·六	二六	一一七	0八0	一六	八五·四	五七·三	11110
(+)	±	(+)	÷	(+)	(+)	(+)	(+)	(1)	=
(十) 二八七	九二	九。	=	四。三		1 111 - 1	八五	一六〇	四五

依り男二多キモノアルモ概シテ女二多キヲ例トスト謂フベシ。 上表二據レバ日本及和蘭ハ男二於ラ僅二多キモ殆ド同數下謂と得ペクウルグアイハ殊二男二於ラ多 伊太利、愛蘭順次之ニ次ギラ女ニ多ク都市ハ共ニ女ニ多キヲ見ル故ニ癌死亡者ノ人口比例ハ國ニ 墺地利順次之二次ギラ男二多シ之二反シ合衆國ハ女二於ラ殊二多クハワリヤ、英處蘭及威爾

例 ニ侵サル、者多キニ因ル然レドモ國ニ依リテ男ノ女ヨリ多キモノアルノミナラズ女ノ男ヲ超過スル比 モ亦稍~大ナル差アルヲ見ルハ興味アル事項ニシテ其ノ原因何レニアリヤ大ニ研究ノ價値アル問題 ハ其ノ種類ニ依り多少アルハ勿論ナリト雖女ノ男ヨリ多キハ女ハ男ニ見ル能ハザル子宮癌及乳癌

							1 23
	100000	100000	0.0001	100000	10000.0	0.0001	合計
	0.	0.1	11:-1	- - - -	O. M	0.	九五歲以上
	1.0	0.六	四五五	11-11	0. *	O. II	九〇一九五歲
	四·七	m•11	ニャ・ニ	10.11	九	· ju	八五一九〇歲
	1七.三	四。三	三八・一	二七二	ī.	=-4	八〇一八五歲
	西五七	四五・六	五七		九六八	七四	七五一八〇歲
	八三·五	九八・四	五四十六	±i ±i. ○	一六。一	三三。四	七〇一七五歲
	一二九七	一六五・〇	五三二	六一·九	三五・〇	ニニ・七	六五一七〇歲
	一五六、八	二〇三八	四七〇	×0·=	111111111111111111111111111111111111111	三一九	六〇一六五歲
	一五六・一	一八五・四	三八九	<u>Fi</u>	三九・七	三九・六	五五一六〇歲
	一二八·五	一三八六	三〇・五	三九・八	四十七	四二十六	五〇一五五歲
		七九・五	二五七七	三一六	四六一	四八〇	四五一五〇歲
	七七・三	四三一四	二七。四	二七五	五三〇	五四・九	四〇一四五歲
1/2	五三九	三〇六	11-11	二五六	六一・三	六二・八	三五一四〇歲
	二九•九	セ・ニ	三四·六	二六七	七二十七	七三十二	三〇一三五歲
M	九六	二五	三七・四	二九・五	七七。四	七七。四	二五一三〇歲
-2	二九	1.1	四二-	E E	八一三	スニ・〇	二〇一二五歲
	·i	0	<u> </u>	======================================	九〇・三	九三	一五一二〇歲
	*		二四•六	一六十六	10111-1	一〇三八	一〇一一五歲
			₹0. €	ニハ・ニ	1-11-1	111111	正一一〇歲

本ノ男ノ女ヲ超過スル敷ハ死亡者ノ統計ト一致セザル所ナリ。

女五○・三○%ナリ又アールウ*ルリャムス氏ニ據レバ 七八七八ノ 癌患者中五○一七即チ六三・六八% 五%ニ相當シギルスフォード氏ノ那威國ニ於ケル調査ニ據レバ男一八四一三三對シ女一八六三三即チ シト又フリーフ氏ハ五六二四ノ癌患者解屍中男二〇〇三女三六二一卽チ 女六四•三八%ナリト 謂フ要 ハ女ナリシト謂ヒアシ"フ氏ハ四五七四ノ癌患者解屍中男一八三八女二七三六卽チ女五九•八二%ナリ 其ノ他シ 二歐洲諸家ノ報告ハ患者、剖檢成績共二女ニ多キヲ見ル。 ムプソン氏ノ英國ニ於ケル 調査ニ據レバ 男二五六三三ニ對シ女六一七一五即チ女七〇・六

第六 癌死亡者 / 年齡別

書ニ徴スルニ本症ハー般ニ三十歳以上六十歳以下ニ多ク三十歳以下及六十歳以上ニハ稀ナリ而シテ殊 成)ヲ掲グレバ下ノ如シ。 及全死亡者ノ年齢別比例 (人口年齢構成及死亡者年齢構成) 並癌死亡者ノ年齢別比例 ニ多キハ四十歳以上五十歳及五十歳以上六十歳ナルヲ見ル今死亡者ノ年齢別ヲ調査センガ爲先ヅ人口 癌腫ノ發生ハ年齢ト大ナル關係ヲ有スルハ旣ニ明瞭ナル事實ニシテ敢テ贅言ヲ要セザルナリ即 (癌死亡者年齡構 チ成

第二〇表 人口、全死亡者及癌死亡者年齡別比例表

 一二九・九
 一二九・三
 三九五・九
 三六八・四

 中齢別人口構成(人口干中)
 均死亡者年齢構成(死亡干中)

 男
 女
 男
 女

 男
 女
 男
 女

五歲

均癌死者年齡構成(死亡千中)

	明治三十九年乃至四十三年	刀至四十三年	明治四十四年乃至大正四年	乃至大正四年
	男	女	男	女
0 五歲	1	1	1	1
五一一〇歳	1	1		4
一〇一一五歲	1	*	1	1
一五一二〇歳	0	O. 1	〇 五	〇九
二〇一二五歲	○ <u>1</u> 11.	<u>-</u>	1.11	111-1
二五一三〇歲		II.	11·0	
三〇一三五歲	M.	==-	八二	二八。一
三五一四〇歲	=0.H	li li	10.4	五四二二
四〇一四五歲	四六、八	八八十三	五二。六	九二・六
四五一五〇歲	- O入· O	二三七-	10:1-4	1三六-三
五〇一五五歲	一七九八	一八一八	=00·h	
五五一六〇歳	ニスー・ニ	二三五・六	三〇七.五	二五四。四
六〇一六五歲	三八三六	EOE.	四二二四	三〇九・一
六五一七〇歳	四二七六	三〇三・五	四八八十二	三四四八八
七〇一七五歲	四四九·五	三一三八	四七五九	川川四-七
七五一八〇義	三五九•四	二七六・一	四四	三〇八十六
八〇一八五歲	二二五。四	二〇五七	二六三・七	二九二

〇矢田・本邦癌死亡者ノ統計的調査

二十七

備考 一、年齢別人口中年齢不詳者ハ之ヲ除外シテ算出セリ以下年齢別調査皆同ジ

二、※ハ比例敷ノ微少ナルヲ示ス以下皆同ジ

增 男女共二五歳以下二於テ人口ノ多キ比例ヲ超越シテ特ニ多ク殊二男二於ラ然ルヲ見、 女二於ラ多ク此ノ年齡以上ハ男ヨリ少シ然ルニ癌死亡者ノ年齡別人口ハ十歲以下二於ラ之ヲ見ザル 五歳迄ノ中間位ヲ占メ其ノ以上八十歳迄ハ年齢ノ増加ト共ニ多ク以後ハ人ロノ少ナキト等シク其ノ敷 リラ三十五歳以上七十五歳ニ至ル者就中五十乃至七十歳ノ者最多シ。 以上二於ラ頓二增加シ殊二四十五乃至七十歲就中五十五乃至六十五歲二於ラ多ク其ノ後年齡ノ增加 減ズ而シテ男ハ五乃至四十歳迄ハ女ヨリ少ク以上七十五歳迄ハ女ヨリ多シ卽チ五歳以上四十歳迄ハ ナラズ之ヨリ以上三十五歳迄ハ年齢ノ増加ト共ニ遞加スルモ甚少ク男ハ三十五歳以上ニ至リテ頓 上表ニ據レバ年齢別人口ハ男女共ニ年齢ノ増加ニ正比シテ其ノ數ヲ減ジ一般死亡者ノ年齢別人口ハ 加シ五十乃至七十歳就中六十乃至六十五歲ニ於テ特ニ多ク爾後年齡ノ増加ト共ニ減少シ女ハ三十歲 ニ少ク女 少々十五歳以上二十歳二於テ稍~増加シ其ノ後五十歳迄ハ概シテ五乃至十五歳迄ト十五乃至二十 ハ男ニ比シ五歳早キ年齢ニ於テ増減スルヲ見ル之ヲ要スルニ癌死亡者ハ一般死亡數ト異 以後十五歲迄 ナ ŀ

Ti ヲ以テ明治四十一年及大正二年ニ於ケル静態調査ノ年齢別人口ヲ中心人口ト假定シ之ニ對スル前後各 一箇年間 以下更二年齢別人口二對スル癌死亡率ヲ左ニ揚グ但シ毎年ニ於ケル年齢別人口ハ之ヲ知ル能ハザ ノ死亡率ヲ算出スルモノトス。

第二一表 癌死亡者年齡別人口(十萬比)比例表

男 四五一五四歲 一〇五•四 一五四•八 一四五•〇 女}四五—五四歲 二二二•九 二三一•九 一九四•二 一四七•一 一六四•五 一七三•八 一九○•七 二八○•五 五五一六四歲 二五七。四 五歲以上 六一七·二 七〇一·九 三〇三·六 四二四·四 三〇二·六 六三七·九 八一五·二 七一九·九 五一六四歲 三八六・四 歲以下 五〇〇。四 八九・〇 七二 三九〇・二 三二六・九 二二一・七 三四五・九 三三七・〇 四四〇・八 三四七・八 二五五・三 二七一・二 三四四・一 三七四・一 四八四・八 八四·五 六九九・二 三七八・八 六•一 五•六 七五二 九三•三 一五〇•七 一三五•四 二〇一•六 一五六•九 二二二•九 三九四·七四二四·五 五八·八 七五·四 五八 五三 七四四·三一〇四七·四 七一一四 五 五二九•九 三九〇•三 七八二一〇七〇 四九 七二七九 九二〇・二 二四七·五 九二十七

於テハ却テ男ヨリ少キ國多シ調査ノ年齢區分ヲ異ニスル左ノ三國ニ於ラモ是等ノ關係ハ共ニ同 ヲ見ル。 ハ男ニ比シ早クヨリ死亡率増加シ三十五乃至四十四歳ニ於テ殆ド男ノ倍數ナルヲ見、六十五歳以上ニ 據レバ各國何レモ男女共二四十五歲以上ニ於テ頓ニ增加シ六十五歲以上ニ於テ頂點ヲ示シ女 ナル

第二二表 各國癌死亡者年齡別人口比例(十萬比)比較表 其二

			Simi	E-19	
男 四〇一四	11-0m	(三〇歲口	調查年	图	
九歲	九歲	万下	年		
八〇	九	111	九一九	和	101.
九	Ó	九	二八	蒯	10101
一〇四・七	二六十三	三・入	九二二	パリリヤ	マ 一日日本
1111	111	-	九	瑞	3
五八	六	二九	0-	西	1
女~四〇一四九歲	三〇一三九歲	(三〇歲以下	調查年	阖名	5
女一四〇一四九歳 一一六・三	三〇一三九歲 二九・三	(三〇歲以下 二八	調 査 年 一九〇八	國 名 和 剛	り、一日日十二日日
女~四〇一四九歲 一一六·三 一八七·五	三〇一三九歲 二九•三 五二•三	[三〇歲以下 二九 三七	九〇八 九一一 九一〇 調 査 年 九〇八 九一 九〇一	國名和 蘭 パワリヤ	7

〇矢田·本邦癌死亡者ノ統計的調査

上長二歳レバ有司	合計	九五歲以上	九〇一九五歲	八五一九〇歲	
四ノ周至トモ島正し	₹0·=	三六五	七八・一	一五〇九	
一香、十丘炭以上年	合 計 六〇·二 五九·七 六五·八 六四·六	八七・〇	1:10:1	一大二二	
給ノ焦ルト比ニ兎加	六五·八	二六九	五七九	三三二五	
シ男、朱二四十	六四-六	四五七	九二五五	11. 10. 12.	

亡者ノ年齢構成ニ於ラ知レルガ如ク男ヨリ約五歳早ク其ノ増加ヲ始メ四十乃至四十五歳ニ於ラ旣ニ大 除クノ外殆ド何レノ年齢ニ於テモ前五年ニ比シ増加セルヲ見ル。 生殖器及乳房ノ男子ト異ナレル點ハ與テ力アルモノナルベシ又上表ニ據レバ後五年ハ九十五歲以上ヲ 二於ケル下降モ男子ノ如ク急速ナラズシテ階段狀ヲ呈ス是等ノ原因ハ茲ニ之ヲ説明シ能ハザルモ女ハ 二於ラ順二加ハリ爾後漸次上昇シテ六十乃至八十歲二於テ頂點二達シ次デ漸次下降シ女ハ前記ノ癌死 二増加シ其ノ頂點ハ等シク六十乃至八十歳ニアルモ男子ノ如ク急峻ナル増加ヲ見ザルナリ且其ノ以後 コネニ想に、呼厄ノ誹瘡トモ痘死亡者ハ十五歳以上年齢ノ進ムト共ニ遞加シ男ハ殊ニ四十五歳以上

以下各國ノ年齡別人口ニ對スル調査成績ヲ掲グレバ左ノ如シ。

第二二表 各國癌死亡者年齡別人口比例(十萬比)比較表 其一

三五	三五	. (M)	國
29	五歲以下	查	
四歲	下	年	名
==		1-	合
111-11	四·六	九〇三	衆
_			威英
四一·三	四九	九〇一	保護期間
=	九	0-	及
pu	_	1	爱
四三	<u>pu</u>	九〇八	闡
-		1-	伊
三一・人	四九	一九〇八	太利
八	九	=/(
三六十	11.	九〇八	H
七		ON	本
11		-	墺
三八二	四	九〇八	聯邦
			D
方六・一	110	九〇七	かアイ
	六	一七	1
124	1.4.	一九〇八	紐
四六。四	ホー	三分	育
Ti.		1-	倫
五四十七	七五	九二一	敦
· Lu	11	-	11

六〇十六五歲	一〇五・二	114.0	1011-11	1三0.六	一〇三・九	一八五	
六五一七〇歲	八二七	九五·九	七四·八	九一・三	七九十一	九三・六	
七〇一七五歲	五五七	六七•九	四六·九	六二・二	五一一四	六四·入	
七五一八〇歳	三二.四	四五七	二七:二	三七十六	二九・六	四〇八	
入〇一八五歲	一六・三	二六。四	一三九	111.4	一 五 〇	二三九	
八五一九〇歲	九五	四八八	八三	四四	八八	P9	
九〇一九五歲	八〇	0.01	六·九	1 = 1 = 11	七三		
九五歲以上	10.1	二九・二	九。三	1 1/- 11	九十六	八〇	
合計	=-0	三三九	三〇十六	三四七	三〇八	三四・三	

增加 全ク之ヲ見ザルモ爾後年齢 最多ク爾後ハ殆ド年ト共ニ滅ズルヲ見ル都市ノミノ狀況モ亦之ト同一ナリト雖其ノ率全國ノモノニ比 シテ殊ニ 記最多年齢ニ於テ男ハ全國ノ三一七•六ニ對シ三四一•四%女ハ全國ノ四七五•六ニ對シ五三四•一% シ多ク男ハ二十歳以下(二十乃至二十五歳ハ同敷)女ハ三十歳以下ニ於テ少キノ外各年齢ニ於テ多ク上 上表 ノ差著シ然ラバ全癌死亡者ニ對シ各年齢別比例ハ都市ト鄙トニ於ラ如何ナル差異ヲ有スルセ シ男ハ五十乃至六十五就中五十五乃至六十歳女ハ四十五乃至六十五就中五十乃至五十五歳ニ = 女ニ於テ其ノ差ノ大ナルヲ見ル之ヲ要スルニ四十五乃至六十五歳ノ癌死亡者ハ他年齢ニ比シ 據レバ同一年齡ノ死亡者中癌死亡者ハ其ノ年齡別比例(第二○表)ト等シク十歳以下ニ於テハ 對スル比例最多々都市ノミノ狀況を亦之ト同一ナリト雖一般ニ其ノ率大ニシテ殊 ノ増加ト共ニ遞加シ男ハ二十五歳女ハ之ヨリ五歳早ク三十歳ニ至リラ頓ニ 二女二於ラ 於テ

〇矢田·本邦編死亡者/統計的調查

以下同一年齢ノ全死亡者中其ノ幾何ガ癌腫ニ因ル死亡者ナルヤヲ調査シ之ヲ男女ニ依リ區分シ全國 【六五歲以上 九七五·六 七六六·八 五〇一六四歲 三六五・二 三二六・三 三七七・八 九一九十七 】五○-六四歲 三四九·四 三六八·五 三一四·八 一六五歲以上 七九八·一 七四八·八 七五一·九

ト都市ノミトノ成績ヲ揚グレバ下ノ如シ。

	全 國 男 各	都 市 市 亡者中	各年齢死亡者中癌死亡者比例 (千分比) 表	都 (千分比)表	全 國 計	都
tends	1	1.	1	-1	1	1
一〇一一五歲	1	1	*	0.	1	0
一五一二〇歳	O.	· M	〇六	0.	· 0.4	O.
二〇一二五歲	- •	·	11-11	九	一	- £
二五一三〇歳	二六	三五	八五	八二	五九	六.0
三〇一三五歲	八十六	九五五	二六六	二七九	一八七	九二
三五一四〇歲	一四七	二六·九	五二六八	五四九	四〇・〇	四〇七
四〇一四五歲	四九。一	五二五五	八六-三	九四·三	六七	七一:0
四五一五〇歲	七七。五	ハニ・ニ	0.1111	二九。一	九六。七	00元
五〇一五五歲	100.00	一〇五・八	一二九・三	一四一・六	一二二八	一九七
五五一六〇歲	11:0	一一八・六	0.11111	一四二八	一一六七	一二八・一

六五一七〇歲	一七四・三	四三〇	一七九。〇	二三七〇	一三〇六	一三八:
七〇一七五歲		七二・九	一〇八八八	八八〇	八〇六	八九。
七五一八〇歲	四三・七	二九。九	四五·八	四三三	三六・六	四四
八〇一八五歲	<u>五</u> -	九二	一六•〇	一七。四	一四。七	14.
八五一九〇歲	E-0	一,六	111-11	四五五	三五	<u>M</u>
九〇一九五歲	O·六	0.=	九〇-九五歳 〇・六 〇・三 〇・六 一・〇	- •	〇八	1.0
九五歲以上	0.=	0.	0.1	0.3	0.=	0.
合計	100000	100000	100000	100000	0.000	10000
癌死亡者/人	丁七列八全國	及部二於テ	い男ニ多クがお	ロニ於テハ女ニ	多キハ第丘京	密死二者ノ

出 述 控除ス 止 及都鄙別年齡別人口 リト雖既記 ムヲ得 200 セル第二一表ノ同 ノ部ニ於テ記載シ之ガ原因ノー 別るピオッノ上以传、名園及旨ニがラン男ニ多の都市ニがラハ女ニ多キハ第五癌死亡者ノ男女別調 タリ 漸 ルトキハ男女共ニ 次增多スルヲ見ル然レドモ本表ハ全國及都鄙ノ比較ナルヲ以テ大ナル誤ナ ズ 此 " ノ如ク都 ノ現住 而シテ之ガ原因 期間 = 人口 市ノ年齢別人口ハ警察署ノ調査 對スル癌死亡比例ヲ算出スレバ左表ノ如シ今此ノ全國ノ成績ヲ 都市ハ全國 ノ人口比例ト對照スルトキハ五十歳以上ニ至リラ其ノ差増加シ年齢 ノ大正二 ノ探究上都鄙別年齢別人口ニ對スル癌死亡比例 年末二於ケル人口 部ハ住民ノ年齡別人口數ノ差異ニ基クモ 及鄙 ヨリ多ク鄙ト ヲ中心人口ト假定シ其 = ノ差、 據ル現住人口ノ外、 男二於テハ少キモ 之ヲ知ルベキ材料 ノニ ノ前後五箇年ニ於ケ ノ調査 女二 3 テ十五歳以下ノ者ヲ カラム 於ラハ稍し ハ緊要ナ 本籍人 カ。 ナシ故 口 iv 問題ナ 多キ ロョリ算 ル全國 増加ト 7

第二五表 都鄙別癌死亡者年齡別現住人口比例(十萬比)表 () 自明治四十四 均年

〇矢田·本邦癌死亡者/統計的調查

以上二 現住人口年齡別百分比例表ニ於テ記載セルガ如ク都市ハ鄙ニ比シ少年及高年者少キニ基ク セルニ下表ノ如クニシテ男女共ニ二十乃至六十歳ニ於テ其比例鄙ヨリ多ク十五乃至二十歳及六十五歳 於テ鄙ョリ少シ(女ノ二十乃至二十五歲ハ都鄙共ニ同數)此ノ現象ハ前記第一七表全國及都鄙別 第二四表 都鄙別癌死亡者年齡別比例(千分比)表 至大正四年平均 モノトス。

		马				
	全國	都	鄙	全國	都	鄙
0- 五歳	1	1	1	1	1	1
五一一〇歲	1	1	1	1	1	1
一〇一一五歲	1	1	1	1	1	1
一五一二〇歳	0.4	0.*	O.+		〇八	<u>.</u>
二〇一二五歲	一十六	11-11	- ±	三九	三六	三六
二五一三〇歲	三四四	六・二	H-0	一二六六	四七	111-11
三〇- 三五歳	八九	三二六	八三	111 1 - 11	三八九	0.01
三五一四〇歲	= 0	111-11111	一九・四	五四·八	六一·五	五三八
四〇一四五歲	四一八	五六。四	三九・六	七二、五	ハニ・六	七〇九
四五一五〇歲	七八八八	101.0	七五。四	1011-1	一〇七九	1011.01
H	一一六十六	一三八・一	1 1 111 - 111	一七五	一一七。三	一一七九
五五一六〇歲	一八二・三	一九五•六	八〇三	五三三三	一五五八	一五二九
六〇十六五歲	10三六	一九六•九	二〇四·九	一五八。三	一四九•五	一五九七

歲以上 一〇七·〇 計 一四六·七 一二八〇 六九・二 一四七·七 一三九·五 101-1 10四・五 一九一七七 六六・七 一七二、四 六八·〇 一二六·三 二三〇·入 一九一二 一二八·一 一四一·五 一〇七九 一四二・九 七四・〇 11二十 1100 10六人 100八 一九五・一 七六・九 一七三九 七五。四 一四七〇 六八・六 一九一七七 六五·三

テ鄙ヨリ少ク女ハ十五乃至二十歳二於テ鄙ヨリ少キノミ而シテ總數二對スル比モ勿論都二於テ多シ然 リ又總數ニ對スル比例ニ於テ都ハ鄙ニ比シ男五•四、女一一•六%多キモ十五歲以上ノ比例ハ男一•一、 71 年齡別人口比例多ク又鄙ハ男多キニ拘ラズ都ハ女多シ是等ノ原因ハ之ヲ職業及生活狀態等ニ歸スベキ 都 女一一•三%ニシテ其ノ差少シ是レ旣記ノ如ク年齡別人口ノ都鄙ニ於テ差アルニ基クモノトス、サレド ドモ男女ノ關係ハ鄙ハ男ニ於テ女ヨリ多キモ都ハ女ニ於ラ多ク本籍人口ヨリ算出セル成績ト符合セ 將來研究スベキ問題ナリト信ズ。 三於テハ男女就中女二於テ鄙ヨリ多キハ明ナル事實トス要スルニ都ハ鄙ニ比シ癌多發年齡二於ケ 上表ニ據レバ癌死亡者ノ人口比例ハ都ニ於テ男女共ニ多ク唯男ハ十五乃至二十歳及九十歳以上ニ於

第七 癌死亡者 / 罹患部位

頰、四肢) 女子乳房(男子乳房ニハ稀ナリ)胃(幽門部稀ニハ噴門、 セリ飯塚氏ハ「余ガ泰西諸國就中獨逸國ニ於ラ諸種ノ方面ヨリ發表セラレタル癌ノ發生部位ニ關ス ビルヒ、ヒルシュファルド氏ハ癌好發部ノ順序ヲ列舉シ子宮(殊ニ腟部) 皮膚(下唇稀ニハ耳翼、眼瞼、 副睾丸、 外陰部、 攝護腺、 膀胱、 膵(殊二膵頭)、腎、小腸粘膜、 胃底ニハ最稀ナリ)直腸、 甲狀腺、膽管、肝、 食道、卵巢、

								11110	
		全國			都				
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
〇一 五歳	1	1	-	1	1	1	I	1	1
五一一〇歲	1	1	1	1	1	1	1	1	1
一〇一一五歳	ı	I	1	-	1	1	1	August	
一五一二〇歲	O.E.	0.九	0.4	○ <u>#</u>	0. 六	〇 五	0.*	0.九	0.1
二〇一二五歲	-	11-1	111-111	·九	二九	=		- -	11-11
二五一三〇歲	111-111	11.11	七二	<u>#</u>	1 : 1 • : 1	八十六	=	九·五	せ・○
三〇一三五歲	八七	二九・三	一九〇	一六	三六・一	======================================	ハニ	ニス・ニ	一八・二
三五一四〇歲	二元	五五九	三八·六	三〇八	六四·九	四七〇	110.11.	五四	三七三
四〇一四五歲	五三・六	九二八	七二·九	七〇・三	五五七	九一・六	<u>#</u>	八九十六	七0.
四五一五〇歲	一〇六・六		一二三六	四一一	一七四八	一五六・七	101-六	一三七八	一一九十三
五〇一五五歲	=======================================	ニーニ・七	二三六	101·1	二八四・七	二九三・五	1011-4	三〇五七	11001
五五一六〇歲	三二八・三	二七〇・三	二九九・五	四四九·七	三七五・二	四三三四	三四五	二五八八八	二八六十八
六〇一六五歲	四五二〇	三三三五	三九一八	六五〇·三	四六九·三	五五七一八	四三三〇	三一八九	三七五·六
1	五一八十	三七〇・三	四四二	七二二十一	五六二・八	六三六・〇	五〇一二	三五二・六	四二五二
七〇一七五歲	五一六、四	三六二十六	四三四十六	七三五・八	五七八〇	六四三·八	五〇一・四	三四五·六	四一八・五
七五一八〇歲	四四六。四	0-111111	三八二・二	六八四·三	五 二 三	五七七	四三一六	当一七十	三六八・二
入〇一八正藏	二九二・三	111111111111111111111111111111111111111	二五七・三	四〇三・九	三四九·三	三六八・六	二八五·五	二二二十六	二四九二
八五九〇歲	0.0	一九八十六	Hom.	四二三·五	四三一七	四二九・二	二〇二·九	一八六·七	一九三二

- (一)口, 腔, 口腔, 齒緣, 軟口蓋, 舌, 喉頭, 咽喉粘膜
- (二)食 道 食道(癌性食道狭窄ヲ含ム)
- (三)胃及肝臟胃、隔噎、肝臟、膽產
- (四)腹膜、腸及直腸 腸、腸間膜、直腸、肛門、腹膜,大網膜
- (五)婦人生殖器子宮、膣、陰脣
- (六)乳 房 乳房(乳房翻花ヲ含ム)
- (七)皮 膚 皮膚、顔面、唇、頰、表皮、顎下部、頸部、手背、手指
- 他ノ職器 縱隔實 頸部水脈腺,耳下腺,甲狀腺、腋窩腺、鼠蹊腺、腎臓、膀胱、

(九)不明特二部位ヲ示サッルモノ

腸及直腸」、「口腔」、「皮膚」ノ順序ニシラ女ハ「胃及肝臓」、生殖器」、「腹膜、 五分ノ三ニ過ギズ之三反シ女子固有ノ「生殖器」及「乳房」ノ癌ハ甚ダ多クシテ「生殖器」ハ「胃及肝臓」ニ = 同數ナルノミ而シテ胃及婦人生殖器ニ多キハ上記ノ調査成績ト相一致スル所ナリ次ニ都ハ鄙ニ比シ男 皮膚」ノ順序ラナシ「生殖器」及「乳房」ヲ除外セバ女ハ總ラ男ヨリ少ク唯 腹膜、 ~シ稍~少ナキノミ然レドモ其ノ他ノ部位ハ皆女ニ於テ少シ要スルニ男ハ「胃及肝臓」、「食道」、「腹膜、 !ノ臟器」及「口腔」順次之ニ次が然ルニ女ハ「胃及肝臓」ニ於テ最多シト雖其ノ 率男ニ比シ 大ニ少ク約 於ラ「口腔」及「食道」僅二多キモ「胃及肝臓」二於ラ少ク 其ノ差十萬比五・○二達ス 之二反シ女ハ何レ 上表ニ據レバ都鄙共ニ男ハ「胃及肝臓」最多ク之ニ次グハ「食道」ニシテ「腹膜、腸及直腸」之ニ次ギ「爾 腸及直腸、乳房、口腔、 腸及直腸」二於テ殆ド

年二於ケル癌死亡者ノ部位別人口比例ヲ調査シ都鄙ノ狀況等ヲ對照セバ左ノ如シ。 異ニセリ其ノ他本邦ニ於テ患者又ハ病理解剖的方面ヨリ調査セル成績アルモ、 次グハ胃、腸(盲腸ヲ含ム)、乳房、肝臓及膽囊、外皮、舌、陰莖及包皮、 癌等之ニ次グ」ト佐藤博士!一二二〇人!原發癌ニ付調査セラレタル成績ニ據レバ子宮癌最多ク之ニ ル頻度數ヲ總括シ序列スルニ胃癌ハ第一位ヲ占メ子宮癌ハ第二位ニ位シ乳癌、 食道ノ順序ニシテ各其ノ趣ヲ 直腸癌、肝臟癌及食道 コハ後ニ 譲り最近五箇

第二六表 癌死亡者罹患部位別人口比例(十萬比)表 (自大正元年)

n	腔	全四國	二,都	三 鄙	- 全 ○ 國	- 都女	- as	()	o '	○ 全 國 王 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
食	道	六•三	六•五	六・三	11-11		i i			二-三 四-三
胃及	胼織	五〇八	四六・五	<u>n</u>	11111111	=	1-1111	11-1 1111-1	31.· 1	111-1
直腹陽膜	腸及	三七	三七	三七	三十六					三五
٨	生殖器				ニー・六	=	三六			二二:三 10.七
乳	房				-0		11.11	二二	一九	一九
皮	庸	○九	〇八	○九	O.六		0.六			〇-六 〇-七
其他	職器	=-	111-1	= -	九		产		一元	一九二五
不	明	0.六	O.	0. 六	〇六		O	〇四		〇. 六
總	計	六七・八	六三・八	六八·四	六五·九	+	七0:二	〇二 六五・一		六五•一
	備考	本表區分ノ	罹患部位二編	入セラル、	部位等左ノ如	2) 13	下部位出	本表區分/罹患部位ニ編入セラル、部位等左ノ如シ以下部位別表皆同ジ	以下部位別表皆同ジ	以下部位別表皆同ジ

癒セル者ヲ缺クガ如キ材料一方ニ偏スル等ノ嫌アルヲ以テ唯參考ニ資センノミ先ヅ患者ニ就テノ統計 外科醫ニハ婦人科ニ屬スルモノ少ク病理解剖ニハ生活程度ノ高キ者及女子少ク且外科的手術ニ依リ治 下ノ如シ然レドモ前記男女別調査ノ如ク其ノ観察一局部ニ限ラレ然モ各専門ノ種類ヲ異ニスルニ從ヒ 今本邦ノ從來ニ於ケルニ、三ノ癌部位別統計ヲ上記ノ分類ニ依リ綜合セル成績ヲ揭ゲ互ニ對照セパ

第二八表 癌患者罹患部位別表

ヲ掲ゲン。

合	其他	皮	乳	A	及腹	胃及	食	D	調査	調査	報告
計	ノ職器	W	房	生殖器	直膜、腸腸	肝臓	道	腔	期間	場所	者
				Del		ord			十 三 箇 至同三十九年十 七 三 箇	名古屋好	佐藤勤
=0	三九	三五	七八	六〇	八五	七六	1	二大	年月月	生館	也
									約至自	佐	
			,						七四十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	藤外	部
六四	五二		11		101	九九九	H	0	简年四 十二	科教	賽
=	=	1	29	=	_	九	-	1	年月月	宝	夫
									約 主 主 主 主 主 十 三 十	近藤外	飯塚
七五三	11111	一〇六	1 111 1	八	四八	一八七	五三	八八八	后 年 月 年 月 月	科教室	
	-										
二六一六	111111	二五三	1111111	四七〇	三三四	七六二	二三五	二二六			計
											序
	8	6	4	2	3	1	7	5			列

O矢田·本邦癌死亡者ノ統計的調査

三二人

リヤ大二興味アル問題ナリトス。 ノ部位二於テモ鄙ヨリ多ク殊二 生殖器 二於テ二・五 胃及肝臓 二於テ一・○多シ要スルニ都ハ鄙二比 シ男ハ「胃及肝臓」ニ於テ殊ニ少ク女ハ「生殖器」及「胃及肝臓」ニ於テ殊ニ多シ是等ハ其ノ原因何レニア

%ヲ占ムルヲ見ル。 ムルヤラ示セバ左表ノ如クニシテ男女共ニ生命上貴要ニシテ然モ手術ノ效果充分ナラザル臓器ノ癌腫 ニ於テ最多々「胃及肝臓」ハ男ニ於テハ約七六%女ニ於テハ約五○%ヲ占メ「婦人生殖器」ハ女ノ約三三 上表ノ事實ョ百分比トナシ總數ノ多キモノョリ列舉シテ各部位ノ癌死亡者ハ總數ニ對シ幾何%ョ占

17	第二七表
4	癌死亡者罹患部位別順次(百分比)表
	(至同五年平均)

合計	皮膚		乳房	乳口房腔	他ノル	他」直膜、	他」直膜	他直膜、生殖	他の直膜、生殖肝	他直膜、短所
100.0	1•11			三大	三四六六六	三四五六六五	三四五九六六五四	三四五九六六五四	三四五九 五六六 五十二十六 六十二十六 六十二十六十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	三四五九 五十五六六六五四 六五回
100.0	1 • 11				四四九	四四五	四四五〇四九八二	四四五〇四九八二	四四五〇三四九六二四	四四五〇三部四九八二四
00.0	1.11			三四	三四六	三四五四六五	三四五九四六五四	三四五九四六五四	三四五九 五九 八四六五八	三四五九 五部四六五四六
00.0	○九	=		- -	一 二 五 九	一二五五五五九五	一二五三 五九五五	- 二 五 三 三 五 九 五 五 -	- 二 五 三 四 九 五 九 五 五 - 五	一二五三三九九 五五五一五國
00.0	0.九	111-11			一三七四	一三五七	一三五三七四七六	一三五三四七六一	一三五三四七九一四七六一四	三四 三四七都七四七六一四
10000	·九	二九	一・六		二六	二五八四	二五三八四六	二五三三八四六〇	二五三八八	二五三三九郡
00.00		<u>.</u>	二六六		三六	三五六六六	三五六八六五	三五六六六六六六六六二	三五六二十	二 五 六 全 二 五 六 · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
100.0	1.1	- -	11·0		四二	四五二七	四五六九	四五六七二七九〇	四五六八六六十九六六	四五六十八六都二十九八六
00.00		- <u>i</u>	二 四		三・六	三五六四	三五六六六五	三五六六六六六六二	三 五 六 三 三	三五六六三部六四五二三

合.	•	単他ノ臓器	及	40	斯人生殖	直膜、	及肝	
計	明		所	房	器》	陽陽	臟	
0=0		<u>=</u> 0	Ŧi:	五.	Ħ.	二六	=0	
				٠				
八一		八三	w-0	_	六	六	四六	
111	七	111	六	-	0		ZY.	
三六		一大	11	Ħ.	一八	H	五八	
							u,	
一七九	t	一九	四四四	1111	九三	101	六五二	
					4			
		2	,	9	-	3		

備考 渡邊氏ノ子宮及卵巢以外ノ生殖器癌ハ假ニ「爾他ノ臟器」ニ加ヘタリ

腸」、「婦人生殖器」、「食道」、「口腔」、「皮膚」、「乳房」ノ順序ニシテ「乳房」、「皮膚」及「口腔」ニ少キハ 死亡 上表ニ據レバ病理解剖的成績モ亦「胃及肝臓」第一位ヲ占ム「爾他ノ臓器」之ニ次ギ他ハ「腹膜、腸及直

ヲ占メ之ニ次グハ「婦人生殖器」ニシテ「腹膜、腸及直腸」、「食道」等之ニ次ギ「乳房」、「口腔」、「皮膚」等ニ 者ノ統計ト一致スル所ナリ。 以上ニ依り本邦ニ於ケル癌腫ハ「胃及肝臓」(胃癌其ノ主タルモノタルハ勿論ナリトス)ニ於テ第一位

於テハ少キモノト謂フヲ得ンカ

ナル事實ナリトス此ノ好適例トシテ著明ナルカハカシュミアニ於ラ 初生兒ヲシテ 直接ニ燃焼セル竈上 ニテ加温スル爲腹部ノ皮膚癌多ク印度及錫蘭島ニ於テハ女子ノ絕エズ胡椒ヲ嚙ミ睡眠時ト雕之ヲロ中 前記載ノ如ク風俗、習慣等ノ癌發生ニ影響アルト等シク其ノ發生部位ニモ亦差異ヲ來タスベキハ明

備考 一、本表區分ノ福患部位ハ第二六表備考ノ外左ノモノヨモ編入セリ次表亦同シ

口底、口蓋、頰粘膜、扁桃腺

(二)婦人生殖器

上頭 下頭、

氣管、

二、阿部氏ノ「轉移」へ之ヲ除外セリ

ニアルヲ見ル。 テ少キハ自然ノ結果ナルベク従テ「腹膜、腸及直腸」ハ患者ノ第三位ヲ占ムルニ對シ死亡者モ亦第四位 ヲ見ル而シテ生命上ノ危險少ク且比較的外科的治療ノ效果アル「口腔」、「乳房」及「皮膚」 ハ 死亡者ニ於 ハ「腹膜、腸及直腸」、「乳房」、「口腔」、「皮膚」ニシラ死者ニ於ラ第三位ヲ 占ムル「食道」ハ 第七位ニアル 上表ニ據レバ「胃及肝臟」第一位ヲ占メ「婦人生殖器」第二位ニアルコト死亡者ノ總計ニ同ジ之ニ次グ

病理解剖ノ統計ハ左ノ如シ。

第二九表 癌死亡者剖檢罹患部位別表

計

序列

查場所 Ш Ш 極 極勝三郎 病 理學教室 二至自 石橋松藏、鷹津元郎 二十二 當年 學教室 學科大學 學教室學

期

五六

	4	c							男				調	國					女
〇矢田。本邦高	乳房	婦人生殖器	及腹 直膜、 腸腸	冒及肝	口腔	其ノ他	皮膚	乳房	婦人生殖器	及腹直膜、腸腸	胃 及 肝	口腔	查年	名		其ノ他	皮膚	乳房	婦人生殖器
化亡者ノ統計的 開	五六八	五三三	七五	二三六		一八・○		0.	•	五九九	11.01	四三	九〇八二八	伊太利	第三〇表	10.0		一四·三	二三。四
概			三四							三五五					10				
		五三	八九	二九	·	一九。五	二九	•		1	三二十七	九•五	九一八八二八八	墺聯邦	4罹患部位別	五 五		一三九	ーニ・六
	三五	-	四五	二六・九	O.	一八。三	一 - 六			24					68-0				
	一門。七	11三-四	-1-1	EO.E	0.九	1i -	一六			10.3	三〇九	四七	九八八二八	紐青	[比) 比較表	九一	○ 九	九一	ニー・六
HHH	二〇.重	二六十六	三二五	二七九	一大	二六。六	≡. 0	0.11		=	四一主	<u>N</u>	一九〇八	倫敦	其二	七四	二四四	一三・六	110-111

洋ニ於テハ煙突掃除人ノ陰囊ニ癌ヲ生ジ「パラフィン」、「テール」職工ノ皮膚ニ「パラフィン」又ハ「テール」 癌ヲ生ズルガ如ク國ニ依り其ノ部位ニ多少ノ差アルヲ以テ左ニ各國ノ部位別人口比例ヲ揚グ。 二三五例 / 癌患者中九一三例即チ七三・九%ハ男癌ニシテ 子宮癌ハ之ニ反シ 著シタ稀ナリト謂フ又西 バ四四五例ノ男子癌患者中一二九例ハロ唇ナリト謂ヒゼーガード氏ノ記載ニ據レバ那威國ニ於テハー 二含ムガ為通常男ヨリ少キヲ例トスル口腔癌多キガ如キ之ナリ其他葡萄牙國二於ケル蒐集材料二據レ

及腹	胃	D	其	皮	乳	婦 及腹	胃	п	-		
直膜	及		,			婦 及腹 直膜	及		查		
腸腸	肝	腔	他	腐	房	器 腸腸	肝	腔	华	名	
1 1 - 11	EO.	- •	111-11	三五		七	二八六	四。六	一九〇八	合衆國	第三○表
一八五	= i	一・六	110-11	二。四	0.	七五五	三五・七		一九〇八	威 軍 斯及	各國癌死亡
10.11	11 1 • 1	11-1	九〇		. 0.11	一七五	三五三	-	一九〇八二八	愛蘭	者罹患部位別
0	五四·九	<u>.</u>	一六・二	· -t	0.	·	セニ・〇	Ĭ	一九〇八	和蘭	人口比例 (十萬
四七	五五	〇.七.	一九二	0.*	0	三六	六二・七	一七	一九〇五	アリナ	的比較表
						=======================================					其一

アイ

「皮膚」又ハ「口腔」之ニ次グト謂フベク本邦ニ於ケル癌部位別ニ特異點アルヲ見ズ。 謂ヒ得ベク女ハ等シク「胃及肝臓」多ク「生殖器」之ニ次ギ第三位ハ「乳房」又ハ「腹膜、 本記載ヲ槪括スレバ男ハ「胃及肝臓」最多ク「腹膜、腸及直腸」之ニ次ギ「口腔」、「皮膚」順次之ニ次グト 腸及直腸ニシテ

中心人口ト假定シ其ノ前後五箇年ヲ算出セル 以下更二部位別年齡別人口比例ヲ調査セル成績ヲ モノト 掲グ但シ本表ハ大正二年末ノ本籍人口ノ年齢別ヲ ス。

第三一表 癌死亡者罹患部位別年齡別人口比例(十萬比)表 (主明治四十四年)

0	婦人	及是	夏及肝	食	п		
矢田·本	生殖器	腸腸	· 易臟	道	腔		
邦癌死亡者		-	1	1	1	一五歲	
O矢田·本邦稿死亡者/統計的調查		二,九	四〇九	四	一七	1五一六0歳	男
M.		11111-1	三一八。四	四四五五	一五七七	公歲以上	
	1		1			一元元	
	二八十六	=-0	五五	·	0.4	1五一六0歳	女
	五七八	九二	一八七十六	<u>™</u>	**	70歳以上	
	1	j	1	1	1	一一元歳	
		∃.O	1111-111	二九	1-11	1五一六0歲	計
h	110-11	= • •	五五〇・〇	二九二	10-六	· 0歲以上	

次グハ「口腔」(愛蘭及墺聯邦ノ「口腔」ハ「腹膜、 差アリ日本ハ少キ國ヨリ數フレバ十箇國中第七位ニシテ 四八•四ニ達シ 中數位ニアリ女ニ於テハ少キ ノ外皆同ジ然レドモ其ノ人口十萬比例少キハ男ニ於テ合衆國ノ二八・八多キハ瑞西ノ八四・一二至ルノ ギ之ニ次グハ「腹膜、腸及直腸」、「乳房」ナル國殆ド其ノ半バヲ占ム今是等ヲ其ノ多キモノヨリ列擧シー・ メ等シク中位ニアルヲ見ル之ニ次ギ多キハ男ハ愛蘭及墺聯邦ヲ除クノ外「腹膜、腸及直腸」ニシテ之ニ ハ墺聯邦ノニー•九多キハ瑞西ノ五七•ニニシテ日本ハ少キ國ヨリ 敷フレバ 第六位ニシテ三一•四ヲ占 上表二據レバ各國共二「胃及肝臟」二於テ最多キハ相一致スル所ニシテ殊二男二多キハ合衆國ヲ除ク 他 一七七七 () 五·九 腸及直腸」ョリ多シ)ナリ之ニ反シ女ハ「生殖器」之二次 一二七七 10.0 0.六 九九八 四

同 及腹 生 [] 直膜 殖 器 陽腸 乳 及腹 直膜 腔 房 皮 及腹 同 直膜 腸腸 皮 膚 伊太利(除カラ 英溴酮及威爾斯 ルグアイ ワリ

表トセバ左ノ如シ。

0			皮			A			婦人			及腹			胃及			食	
矢田.			痼			房			婦人生殖器			直膜、腸腸	•		肝臟			道	
本邦癌死	全國	w	都	全國	器	都	全國	點	都	全國	圖	都	全國	器	都	全國	鄙	都	全國
〇矢田・本邦癌死亡者ノ統計的調査	11-11	0.7	0.t	0.7							=.0	三七七	111-1	四 二 - 二	四七二	四二·九	四二	五七七	四四
2	11110	六・七		六九							11四.0	ニス・一	三五	三三四·四	四九〇・五	三四六・二	四六・五	七二・五	四八·四
*11	一十六	0.10	O. 五	0.1	一九	二.四	11.0	二八八	=+	二九二	=-O	三十六	11-1	二五・六	二八·五	二五九	一,六	一。六	*
	· 	四•川	四六	PI PI	九•五	一四·九	10.0	五九•七	九六・五	六二・八	一九九九	三二-四	二〇九	一九五•三	二九七・五	110111-4	五三	二九•四	一六・五
	一九	O. I	0.7	O.	0		•		五三	四五	11-0	三七	=-1	三三一九	三八・二	三四・五	二、ふ	三七	O
二三七	一六・五	正四	七一四	五·六	Ť.	ハ・ニ	# =	11 1 • 1	五二、七	三二六	二六	三五〇	二二九	二六一·九	三八五〇	二七一十六	11.01	四八。九	中一二

4 000	合	不	爾他	皮	乳	
	計	明	臟器	衛	房	
î						
	1	1	1	1		
Ĉ		•	1			
	Эi.	_		_		
		0	-	O		
-	九	PL		六		
	四三二・五	四二	110.11	六·四		
-						
î						
			٠.			
4		1	1	1	1	
	六三-六	O.	一十六	0	一九	
-	===					
0	_	=	0	DU	-Jr	
419	八八		一六	Ö		
	1	1	1	1	1	
	•	·				
	五八・二	O.	九	O.	〇 九	
	合 計 - 五二·九 四三二·五 - 六三·六 三一二·八 - 五八·二 三七○·○	三七	<u>H</u>	五二	T.	

果ナルベ 生殖器ニ於テハ約二倍ヲ占ムルノミ是レ婦人生殖器ノ癌腫ハ比較的弱年者ニ來リ月經閉止期ニ多キ結 上表ニ掛レ バ六十歳以上ハ十五乃至六十歳ニ比シ甚ダ多ク七、八倍乃至十倍ニ達ス然 n ニ獨リ婦人

ナルガ如シ又生殖器ノ六十歳以上ハ鄙ノ約二倍ナルニ對シ都ハ約三倍ナルヲ見ル。 女!「食道」ハ都鄙共ニ十五乃至六十歳ニ於テー・六ナルニ 對シ六十歳以上ハ 都ハニ九・四鄙ハ一五・三 警察署ノ調査ニ係ル現住人口ノ年齢別ヨリ算出セルモノニシテ其ノ前後五箇年ノ平均トス此ノ表ニ バ都ハ何レノ部位何レノ年齢ニ於ラモ 以上ノ部位別年齢別ヲ都鄙ニ分チ調査セル成績ハ左ノ如シ但シ本表ハ第二五表ノ如ク大正二年末 鄙ヨリ多シ然レドモ殊二六十歲以上二於テ然ルヲ見ル例之バ 據

癌死亡者罹患部位別年齡別現住人口比例(十萬比)表 () 重明治 四四年十 均年

	一五一六〇歲 六〇歲以上	六〇歳以上	-	一六〇歲女	一六〇歲 六〇歲以上	一五一六○歳 六○歳以上 一五一六○歳 六○歳以上 計
全國	一九	七。〇	0.4	六·五		1 • 111
腔都	二九	二六。四	•	一〇・五		九
粼	六	一六・三	0.4	六-二		

	海川	£ .	[c]	kuja kuja	į		區區	制					1	ē	開		1		區
=	愛	靜	溢	岐	長	福	石	富	新	Ш	神	東	埼	群	干	栃	关	福	Щ.
重	知	岡	賀	阜	野	井	川	j.lj	潟	梨	奈川	京	玉	馬	葉	木	城	島	形
縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	府	縣	縣	縣	縣	糠	縣	縣
五	四三	四三	五三		<u>.</u>	四三	四七	四三	H.	五三	四六	五八	五六	<u>Fi</u>	六・二	四六	四二二	E H	五四
六-三	四六	四十六	六 • 六	四七	六・二	0	五八八	五七	六·六	六•一	五二	五九	六五	五三	六八八	五、八	五四	五二	六四四
七五	五、六	<u>h</u>	七七	五六	六·九	五九	六·八	六・六	七九	六.五		六・六	六·九	五七	七九	六	六・三	六・一	1:
七五	五十六	£i O	八。四	五九九	七〇	六・二	六。四	六八	七九	六、五	六・一	七〇	六·九	六・ニ	八三	七十六	七四四	六九	七〇
八三	H.	五·	八七七	六一	六·九	六一	七三	六五五	七・八	六五	六•二	七五五	七四	六・二	八。一	せ・ニ	七十六	六•七	セー
せ・せ	六・二	Hi =	八。四	六·五	七五	六・八	せ・○	六九	八。四	六十六	六十六	七五五	七五五	六二	八九	六·五	七七七	七一	八〇
七·四六	五五三	四·九九	七七五	五七五	六•八六	五・八九	六七一	六·五 一	七七四	六·四二	五·九九	六•六七	六·九五 五	五·七七	七九五	六・三七	六·五九	六二七	七〇九

二三九

				ナキョ以テ省略ス	五歳ハ死亡者ナ	9-	備考		
三八六・一	五九・一	三四二	六四・〇	四五三・六	五四三	淵			
五八四・七		五〇三三	セニ・〇	六七四·二	大三・三	都	計	合	
四〇一六		三三九•七	六五·〇	四七〇・三	五五・六	全國			
		三四四	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	四五	○ <u>*</u>	羅			
四四四		三六	〇·五	16. O	· M	都	明	不	
		三。四	O. II	西五	○ <u>#</u>	全國			
一五七		一〇.六	- -	11 1 - 11	11.11	點			
二五·四		一〇・五	11-11	11-11	二十七	都	機器	傾他	

第八 癌死亡者ノ府縣及都市別

府縣別癌死亡者ノ人口比例左ノ如シ。

第三三表 府縣別癌死亡者人口比例(一萬比)表

北	東			北	
宮	秋	巖	青	海	
城	田	手	森	道	
縣	縣	髅	腄	區	
四四四	三五	=·0	二九	11-11	至同三十六年平均 自明治三十二年
五八	三九	三五	111-111	Ö	至同四十一年平均自明治三十七年
+	四七	<u>一</u>	四	四三	至大正二年平均
七五	四·八	<u></u>	<u></u>	四五	大正三年
七十六	五 •	<u></u>	四五	四七	大正四年
八〇	五五	四二	四四	四。六	大正五年
七.07	四。六十	ZI.O	M.O.	四三十	間最近平十

鹿兒島縣 四八八 二九 四四四 -五七七 Ii. 二九 三六 六·四 三十六 四·六 六·七 三六 四七 六·八 = i 四七 三十六 四八八 六·九 三五二 六·四四 四·五〇 五·五七

明治三十二乃至三十六年ニ比シ三分ノ 一乃至二分ノーヲ加へ タリ今最近十年間ノ 平均ニ依リ 其ノー 上表ニ據レバ 癌死亡者ノ人口比例ハ 年ニ依リ多少ノ差アリト雖各府縣共ニ年ト共ニ 増加シ近時ハ

				alla	.la		200	Ħ.	tret	P 4	11	1
入・〇一八・五	七五	4.0		六·五·	×.0	11	H.	O	四五	O	三五	
八八	一八〇	七七		0.4-	六十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二		一六.0	H.	H	PU	四	1
Ħ.	Ö	七五		Ö	Ħ		Ŏ	i	Ó	ī	0	F
京	大	當	埼	富	褔	群	爱	德	秋	青	神	4
都	阪	城	玉	ш	島	馬	知	島	田	森	縄	3
府	IN	舽	縣	縣	縣	縣	縣	軽	縣	縣	縣	1
和	ılı	Ш	鳥	愛	栃	腷	長	高	靜	巌		,
歌山	П	形	取	媛	木	井	崎	知	岡	手		7
縣	帷	鯸	縣	縣	縣	樤	轞	膝	縣	縣		
												7
	新	岛		类	th	兵	大			北		
	淵	樵		城	梨	庫	分			海		
	艀	縣		躯	縣	縣	뺪			道		
	溢	稲		東	岡	神	玄			ME		
	31	岡		京	Ш	奈川	婚			見島		
	縣	縣		府	縣	縣	縣			縣		
	干	===		石			废					
	葉	重		111			島					
	艇	縣		縣			縣					
				熊			香					
				本]1]					*
				軽			縣					
				200			de			*		
				長崎			岐阜					

熊

. 9	H	九				區	测四			區	國	中			E	微	近	
. 佐	宫	熊	脳	大	高	愛	德	香	III	麎	島	岡	鳥	兵		大	京	奈
N	崻	本	阿	分	知	媛	B)1	п	a.	根	山	取	庫	細山	阪	都	夏
縣	縣	縣	縣	糇	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	俳	縣	縣	縣	府	府	縣
六五五		四六	六.三		三六	<u>₹</u> .	三七	三五	六.0		五三	四七	四・六	四四四	五八	五七	せ・ヨ	八三
七十六	四七	六·二	4.0	四九	四·六	五九九	<u>py</u>	四五	七三	四,八	六、六	E E	五六	¥.	六·九	六六	七六	10.1
八寸	H.	六·七	七。四	L L	A.	六•七	<u>#</u>	五七七	七五	五七	七二	六·六	七一	五九	八十六	4.4	八〇	
九。七	五。六	六•六	4.4	五八八	E.	六八八	六・〇	五九九	八六六	六。一	七五	六·六	七五	六・〇	八九九	八。一	八七	11.0
九。四	六•六	六八	4.4	五七	六・二	六·九	五九	五九	七十六	五九	七四	六·五	七八	六二二	九一	七八	7.	1 -In 1
八九	五九	六八八	七·六	六·九	五四四	六·九	五八	六・〇	八四	大・当	4.4	六・六	セ・ニ	六-六	八六	八五五	N.O	1=0
八七七七	五十六一	六七一	七四三	五十六〇	五三八	六·五四	五 五	五·六六	七七二	五·六六	4.11	六·四二	六·九八	五九二	八·四八	七十六九	ス・ニニ	04.1

ル從ラ癌死亡多キ地方ハ總死亡者ニ對スル癌死亡比例多キハ自然ノ結果ナリトス。 第三四表 府縣別總死亡人口對總死亡癌死亡及癌死亡人口比例表(同五年平均

				區	東	į	關				JE .	1	t i	Ĩ		北	
0	新	ili	神	東	埼	群	干	栃	美	福	山	宮	秋	殿	青	海	
田	鴻	梨	神奈川	京	玉	馬	葉	木	城	A	形	城	田	手縣	森縣	道區	
〇矢田•本邦癌死亡者 / 統計的調查	縣二二十三	縣 一八·七	縣一九十	府二一主	縣 二十七	縣 二〇・八	縣二二一	縣 一九・○	縣二〇八	縣一九六	縣 二 - 四	縣 二〇二		- · · · ·	二十七	110.1	口千分比例
統計的調查	三六・〇	三四	三二六	1111-111	三二五五	二八十七	三七一二	三五、八	三四・八	三三・九	三三五五	三七。四	二四八	一九六	一九二	二二十六	を例 對スル福死
	八〇匹	六四〇	六・二六	七一九	七〇六	五·九八	八・二二	六。七八	七一四	六-六二	4.10	七五二	Ti OM	四一六	四一六	四五二	日一萬比例 癌死亡者人
													1				口干分比@ 總死亡者人
	中			區	譤	近		Į.	海海	E	F	重山河	Æ		區	生北	4
	阿	鳥	兵	和	大	京	奈	=	爱	靜	滋	岐	長	福	石	富	
	山	取	庫	歌山	阪	都	夏	重	知	岡	賀	阜	野縣	井縣	川縣	旗	
	縣	樤	縣	縣	府	府	縣	縣	縣	縣	縣	縣	現北	No.	邓丰	那帮	D#4
	九二	一七九	二〇-六	一八三	1111-1	111-111	一九。九	10.4	110-11	九〇	二二九	111 • 111	110.11	二四七	二四・五	11111-11	口千分上 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种 一种
	三四十六	四〇七	1110-111	四七・五	三七十六	三七九	六一。一	三八・二	二八・三	二六十六	三五·九	二八。四	三五〇	二四六	二八〇	二九	亡野スル ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
	六十六六	七三〇	六・ニニ	八十二	七·九四	八〇四	111-111	七八〇	五七〇	Ti OM	八二四	六・〇六	七〇八	た一〇	六・入六	六·七四	后 三 生 之 大 大 大 大 大 大

八五一九0 佐賀縣

一一・五一一二・〇 奈良縣

萬比六•四四ナルヲ以テ上表列記ノ沖縄乃至岡山縣ハ此ノ 平均ヨリ少ク 富山乃至奈良縣ハ之ヨリ多キ ノニ属ス尚上表ニ嬢リ左ノ如ク四箇ノ多發地方アルヲ知ル。 上表ニ據レバ最多キハ奈良縣ニシテ最少キハ沖繩縣トス而シテ全國ニ於ケル最近十年間ノ平均ハー

奈良縣ヲ中心トシ南ハ和歌山縣、北ハ京都府、滋賀縣、東ハ三重縣、四ハ大阪府ノ一團

Æ

二、佐賀縣ヲ基點トシ之ヨリ東北ニ向フ福岡縣、山口縣、島根縣ニ至ル一團

山形縣、宮城縣ノ一團

孤立的ナルモ干葉縣

今更ニ前記統計區ニ依リ少キモノヨリ揚グレバ左ノ如クニシテ上記ノ多發地ヲ包含セル區ニ多シ。

三・五一四・〇

四·〇一四·五

五・五一六・〇 東北區 國

六・〇一六・五 州

東山區

八・〇一八・五 近 畿 (1) (1)

六·五一七·〇

東

111

北 陸

ヲ揭ゲ癌死亡者人口比例ト對照スレバ左表ノ如クニシテ總死亡ト癌死亡ノ多寡トハ相一致セザルヲ見 以下更二最近五箇年ノ事實ニ付總死亡者ノ人口比例及總死亡者中其ノ幾何ガ癌ニ因ル死亡者ナリヤ

	Œ	iala di	1		TEE.	39b	近		區別	£Æ		區	加北		Į.	i de N		東	
0矢田:	桑	廣	M	神	和歌	堺	大		名	靜	· 76	金	富	新	横须	横	東	北區	函
		B	14	月	H			都	古屋		井		T)	湯	須賀	濱	京	仙臺	館
邦痛死亡	市	市	市	市	市	市	क्त	市	市	क्ती	市	त्ती	की	市	市	क	क	市	
本邦痛死亡者 / 統計的調査	四。四	七五	六・七	四七	七一	九一	が。 〇	九五	六・三	七四	九。三	一一•六	六・三	九五五	三。九	四•六	- 六一	七五	セー
	三七七	六·六	ス・え	五六	八六	九〇	×.0	八十六	六・○	六、八	べう	•	八。四	1 11-1	111-111	五六	+	八四	六・八
	三九	六九	九一	五九九	10.0	八六	五六	ハ・ニ	並。六	七・三	七六	二六	九·三		-	五,四	七五	九七	+
	二九九	ハ・ー	八九	五六八	八〇	八七	五·九	ハ・ニ	五・九	五九	六。二	九。三	九七	一三十六	•	六〇	七五五	九七	五二
二四五	三八五	七〇四	七三六	# = = = = = = = = = = = = = = = = = = =	八〇六	九〇八	五九六	八九一	*・	六・八八	八十六六		六・七七	·	三、五七	五・三六	六七四	七四四四	六•七九

.

表大高爱德香山廣島									
三城レバ總死亡三對スル癌死亡比例ハ奈良縣ニ於ラ最多ク六一・一%ニ達シ最少キハ青森 一九・六 三○・穴 五・九八 一九・八 四一・九 七・九八 一点 一九・八 四一・九 七・九八 一点 一九・八 四一・九 七・九八 一点 一九・八 四一・九 二二・四 一九・八 四一・九 二二・四 一九・八 四一・九 二二・八 四・七二 三十四 一九・八 三二・四 五・七四 一元・五 二八・八 四・七二 三十二 一二 三二・九 二・八 三・六二 三十二 三二・九 二・八 三・六 三十二 三十二 三十二 三十二 三十二 三二・九 二・八 三・六 三十二 三二・九 三・六 三十二 三二・九 三・二 三二・九 三 三二 三二 三二 三二 三二 三二 三二	上表	_	111	區	副 四	1	_	區	國
○・八 三六・○	二歳レ	分	知	樧	島	用	п	A	枞
当スル癌死亡比例ハ奈良縣ニ於ラ最多ク六一・一%ニ達シ最少キハ青森 当スル癌死亡比例ハ奈良縣ニ於ラ最多ク六一・一%ニ達シ最少キハ青森 当スル癌死亡比例ハ奈良縣ニ於ラ最多ク六一・一%ニ達シ最少キハ青森	W.	一九十六	九〇	九。〇	二九	10.0	九	一九·六	二〇六
- 10 - 1	對スル癌	三〇・四	二九,四	三五・九	二六・四	二九•六	四一九	三〇十六	三六・〇
良縣ニ於ラ最多ク六一・一%ニ達シ最少キハ青森 ・ 大	亡比例ハ	五九六六	五。五八	六・七八	五·五六	五九〇	七九八八	五·九八	七四六
三五・図 ホ・七三 三五・図 ホ・七三 三四・六 九・二〇 三二・八 五・七四 二八・八 四・七二 二一・八 三・六二 三二・九 六・大七	良縣二於テ最	全	維縣	兒島		佐賀	宮崎	熊	福岡縣
三五・四 三五・四 三二・四 三二・四 三二・四 三二・四 三二・八 三二・九 三二・九 三二・九 三二・九 三二・九 三二・九 三二・九 三二・九	· %	110-11	一六九	一六五	ーセ・ハ	一九九八	一七.	一八九	一九·五
カ・七三 四五十九〇 五十九〇 五十七三 四十七二 〇 本・七三 四十七二 〇 本・大七二	達シ最	三二九	二人	二八八八	三二-四	四六・七	三四十六	三五・四	三八五
	シキハ 青森縣	六・大七	三大二	四七二	五七四	九二〇	五九〇	六七三	七五二

シテ一九・二%ヲ占ムルノミ。

四年ヨリ減ジ十一都市ハ増加シ三都市ハ同一ナリ之ニ反シ府縣ハ四府縣ニ於テ同一、十四府縣ニ於テ 減ゼルノミニテ他ハ皆多少増加セリ)。 如ク顯著ナラズシテ大正五年ノ如キハ寧ロ前年ヨリ減少セルモノアリ(二十九都市中十五都市ハ大正 以下府縣別ニ準ジ都市ノ狀況ヲ掲グレバ左表ノ如クニシテ是亦年ト共ニ其ノ敷ヲ増セルモ府縣別ノ

第三五表 都市別癌死亡者人口比例(一萬比)表

log log		
PU	六七	至同四十三年平均
四四	八〇	至大正三年平均
ī.	八、四	大正四年
カナス	五十六	大正五年
四·五六	七三三	間ノ平均

道海北

一・五一一二・〇 六·五 九・〇一九・五 八・五一九・〇 八•〇一八•五 七・〇一七・五 六・〇一六・五 1-4.0 大 施見島市 和歌山市 廣島市 名古屋市 阪 月 澤 Thi 市 thi rhi 橫 濱 京 th क्त 市 市 क्त F 市

福岡市 二於テ記述セルニ同ジ即チ癌死亡者多キ都市ハ總死亡ニ對スル癌死亡比例モ亦多キヲ常トス然レド 因ル死亡者ナリャヲ揚ゲ癌死亡者人口比例ト對照スレバ左表ノ如クニシテ其 以下府縣別ノ例ニ依リ更ニ最近五箇年ノ事實ニ付總死亡者ノ人口比例及總死亡者中其ノ幾何が癌ニ ノ如キハ總死者少キ為此ノ比例多シ ノ關係ハ前記府縣別調査

第三六表 都市別總死亡人口、對死亡癌死亡及癌死亡人口比例表(至同五年平均

0	面	小	札	
矢田	館	榧	姚	
本邦	區			
癌死亡者ノ統	二六・五		二〇十六	口 千 分比例
計的調查	三三・五		三五	亡千分 と 一 一 一 一 一 一 一 一 名 ル に る ろ に ろ ろ と ろ ろ ろ ろ る ろ る ろ る ろ る ろ る ろ る ろ る
	かこの	四。九八	せ・ニニ	口一萬比例
	東		東北	
	横	東	北區	
	横濱	東京	北	
	横濱	東	北區仙	
	横濱市	東京	北區 仙臺市	口干分比例
二四七	横濱市一七八	東京市二〇二	北區 仙臺市	千死 分亡 上者

市	島市	क्त	保市	市	市	市	信島市	市	
六·四	六五	<u> </u>	主	· O.	八·九	<u> </u>	0	七.	
七七	せ・ニ	四九	111-11	八九	4-51	四七	八十六	せ・○	
六・八	せ・ニ	五	0.11	八〇	七.0	-	六・八	七十六	
六•七	1 .	六八	四·六	七五	五六	三十六	七四	五· -	
六・六七	六•六四	四、八五	Total	九一八	七-川二	四十三	八三〇	六八〇	i

一、横須賀、静岡、下隅及門司ノ四市ニ於ケル自明治三十九年至同四十三年平均ハ明治四十一乃至四十三年ノ三年 平均トス從テ最近十年ノ平均ハ八年間ノ平均トス

二、近時人口五萬以上トナレル都市ハ之ヲ省略セリサレド全都市ニハ之ヲ包含ス次表亦同シ

六・六七ナルヲ以テ佐世保乃至鹿兒島市ハ之ヨリ少ク 東京市以下ハ多キモノニ屬ス 奈良縣ニ於テ癌死 於テ多キヲ見、佐世保ニ於テ最少ク最多ノ約四分ノ一 ニ過ギザル ナリ 而シテ 全都市ノ平均ハ一萬比 亡者最多キハ前記ノ如シト難、奈良市ノ狀況ヲ知ル能ハザルハ遺憾ナリ。 上表中最近十箇年間ノ平均ニ依リ其ノ少キ都市ヨリ揚グレバ左ノ如クニシテ特ニ金澤市及新潟市ニ

三〇一三・玉 佐世保市

三・五一四・〇 四・五一五・〇 小椰 濱市

司市

市

長 崎 市

因ル死亡者ナリャラ最近五箇年ノ事實ニ付調査セル成績ヲ左ニ揚グ。 知ル能ハザルナリ故ニ唯職業別ニテ其ノ有業及無業家族ヲ男女ニ分チタル總死亡者中其ノ幾何ガ癌ニ 職業者ト雖其ノ生活程度ニ差異アルノミナラズ年齢及男女等ニ差アルヲ以テ到底其ノ詳細ナル關係ヲ 狀態トノ關係ハ頗ル興味アル問題ナリト雖全國ニ於ケル職業別人口ハ之ヲ知ルベキ材料ナシ加之同 フィン」、「ラール」職者ハ皮膚ニ「バラフィン」又ハ「テール」癌ヲ發生スト謂フガ如キ癌ト職業、從テ生活 生活程度低キ者ヨリ癌腫ニ侵サル、モノ多シト謂フガ如キ、煙突掃除人ハ陰囊ニ癌腫ヲ發生シ「バラ

第三七表 職業別對總死亡者癌死亡者比例(千分)表 (重同五年平均)

0	ō	九	7	七	大	L	四	=	=			
〇矢田·本邦攝死亡者/統計的調査	、樂物其ノ準備、潤色並ニ睛、練業	、編、絲、織物、編物等ノ製造業	、化學的製品及類似品製造業	機械器具製造業	金属三関スル製造業	、土石類ノ採取及製造業	, 石炭及石油/採取及精製業	、織業及治金業(第四ヲ除ク)	漁業及製鹽業	、農業、牧畜、養蠶等並ニ林業及狩獵		
	五九。四	五九。五	六一・一	三八〇	四八十七	五〇九	三五三	1111-111	六二·四	六七•三	男	有
	五三〇	111-111	四七六		二九〇	四六·五	三九九	=======================================	五九一四	六一・七	女	業者
	五八。八	二七。六	五八八八八	三八・〇	四八、四	五〇・四	二九〇	1111-111	大二-三	六四·九	it,	
	111+111	五	八•五	111011	11.11	七八	=-0	六·九	七七七	五七	男	無
二個九	110 1 11	二九九八	二四十六	二七〇	11-4-11	二四·六	二八〇	二四	二七·0	一六・三	女	業家族
九	三三·五	11111-11	A.O	HOOM	三〇五	一七四	= 0	一四九	一八九九	- -	計	ACK

=	IV	九													
次	E		Ł		eng.	譤	近		區別	库库			生北		區
ギ	此人	シテ	表	神	和	堺	大	京	名	靜	福	金	富	新	核
多	比	金	據	月	歌山		阪	都	古屋	闖	井	澤	th	34	須賀
最多ノニ分	例新	澤市	ンパ	ılî	市	市	市	市	市	市	क्ती	市	市	市	市
ノ一弱	潟市ノ上	之二次ギ四	總死亡二對	一八九九	110.0	111-11	一七.0	一九・五	ーセ・ニ		三四五	二三九	= 1	ニボ・〇	一六。一
トス	ニアリ面シ	%	スル癌死	三一四	四三。四	四二三	三四四	四三・三	三四	三二五五	110·O	四六・一	三五二	四七九	10.
	テ本比例ノ	二達セリ然	亡比例八癌	五、八四	八·六六	八九〇	五八六	八。四四	五八四	六·五四	七·三六	- O. T. =	八八〇	111-110	三・二人
	最少キハは	レドモ福岡	死亡人口	全			او	H	九		四國		區區	国中	
	横須	市	比例	-8007	廰	Ę	佐	熊	稲	Field		下	吳	廣	M
	須賀市	總	1	都	兒島	崎	世保	本	岡	司)	德島	孎		盘	曲
	巾	死亡	多キ	市	市	市	市	ıli	市	市	市	क्त	市	市	市
	ノニ〇・四:	死亡比例少き	ト共ニ新	八九九	二〇-六	一六・〇	 py	110.11	bri	一六・三	= -	一大・二	一六十六	一八三	111-1
	シテ吳市、	為癌死亡特	潟市二於テ	五五五五	三二七七	三五	二九。四	四三〇	四八・一	二八十七	三六・三	四二、八	11-1111	三七一四	四一重
	テ吳市ノニー・一%之	特二多カラザ	最多ク四七・	六•六八	六・七〇	五五四	ニ・スニ	八七〇	六九〇	四。六四	八·四六	六、八八八	三、五四	オ・ 入二	八•七四

第九 癌死亡者ノ職業別

「アルコホル」飲料販賣者ハ他ノ職業者ニ比シ多ク癌腫ニ侵サル、モノナリト謂フガ如キ、上流人士

女ハ「商業」二次グハ「被服及身ノ廻リ品製造、洗濯、湯熨斗業」、「木竹類ニ關スル製造業」、「農業、牧 五•○‰)ョリ少キ モ「漁業及製鹽業」、『化學的製品及類似品製造業」、『木竹類ニ關スル製造業」ハ六○• 次ギ五五・○%以上ニアリ之ニ反シ最少キハ「綿、絲、織物、編物等ノ製造業」ニシテ「其ノ他ノ工業」、「教 製業」、「銅版、石版、木版等ノ彫刻、印刷及寫真業」順次之ニ次デ多キモ三〇•○%以下ニアリ而シテ 育二關スル業」順次之二次デ多キモ二〇・〇%以下ニアリ。 %以上ニアリ之レニ反シ最少キハ「現役陸軍及海軍」ニ シ テ「鑛業及冶金業」、「石炭及石油採取及精 養蠶等竝ニ林業及狩獵」ニ シ テ總比例(六○•三%)ョリ多ク「公務及自由業」、「漁業及製鹽業」之ニ

男い「漁業及製鹽業」、「土石類ノ採取及製造業」、「化學的製品及類似品製造業」ニシテ總平均九・三% 業」等ナリ之ニ反シ「農業、牧畜、養蠶等竝ニ林業及狩獵」及「鑛業及冶金業」、男女共ニ少ク之ニ次グ 「商業」女ハ「公務及自由業」、「銅版、石版、木版等ノ彫刻、 印刷及寫真業」、「船舶連輸業」、「教育ニ關スル 及海軍」、「鍋版、石版、木版等ノ彫刻印刷及寫真業」、「教育ニ關スル業」、「綿、絲、織物、編物等ノ製造業 ノニョ占ムルノミ而シテ 男女共ニ「無職業及職業ョ申告セザル者」最多ク之レニ次グハ男ハ「現役陸軍 成年以上多キガ爲其ノ比、男ヨリ多シ今其ノ總比例ヲ有業者ニ對比スルニ男ハ約七分ノ一、女ハ約五分 少々ない「土石類ノ採取及製造業」、「化學的製品及類似品製造業」ニシテ總平均ヨリ僅ニ多シ。 次ニ無業家族中男ハ多クノ幼年者ヲ包含スル爲其ノ比例少ク女モ亦幼年者ヲ含ムト雖男ニ比スレバ

都市ノミノ狀況ハ左表ノ如シ。

第三八表 都市職業別對死亡者癌死亡比例(千分)表(至同五年平均)

	1 49 1 45	リ重色とも月間でき		はない コン・アー・ピア・		こる。最大で自然で、日本に、日本	
七-二		九三	六三。三	₩0.E	六五・○	總計	
出三六	三九・五	二六・七	近〇・六	近四六	四八:三	業及職業ヲ申告セザル	
=======================================	二九二	一二·九	Hi.	四〇八八	五三五	二五、其、他ノ有業者及有業者ニシ	
二四九	三一九	H.	三五・八	一六十七	四一六	育ニ關スル	
三三六	二六•0	10.4	八。四	-	八·四	役陸軍及海	
二七三	三五・九	三三七	六八・〇	11.0%	六九·三	三二、	
1111-1	111-11111	0.0	四八〇	三八·四	四八·三	帕運輸	
八	<u></u>	九四	八二。七	-	ハニ・七	二〇、人力車挽及乘用馬車業	
==	二八五		三八三	二八〇	三八·九	一九、交 通 業(第二十及第二十一ヲ除ク)	
二六十六	三五・〇	四三三	八四、五	八三、四	八四六	一八、商	
1000	二六七	11-11	二九七	H.	三四五	其 / 他 / 工	
二六。四	一一七	ーセ・セ	二六.五	二五八	二六・五	六彩版石版本版等	
1111-111	二九一四	10.六	六一十二		六一	土木建築	
二十六	二八七	一,亢	四八十六	六八・七	四六。四	一四、被服及身/疆中品製造、洗濯、湯熨斗業	
11111-111	0.11	一二十六	六八·九	六四四	六九•八	一三、飲食料品及嗜好品製造業	
	二九・五	10.0	六一・三	六八・二	六〇・九	二二、木竹類三脚スル製造業	
十二-七	二九十六	1 -1 -1	五三二		五五七	一一、紙皮革、護護ニ関スル製造業	

料品及嗜好品製造業」、「公務及自由業」、農業、收畜、養蠶等並二林業及狩獵」順次之二次ギ他、總比例(六 上表ニ據レバ有業者ハ男女共ニ「商業」最多ク男ハ之ニ次グハ「人力車挽及乗用馬車業」ニシテ「飲食

3	来	狐	_										
ク漁	来」、「土	公外	上表		二六	五		1111	1111	1111	10	九	
業	木	務	一據	總	無	テ其	数		三公		人	交	
及	建	K	v			戦ノ	ute	/H.	及務		力	通	
製鹽	築業	自由	110		来及	業他ノノ	育	役	第及		車	業.	
業	未	業	有		職	申有	-	陸		7914	挽	第	
7.	7,	~	業			告業		(:E	二自		及	=+	
Ann:	教育	Detha	者		7	詳者	阔	軍	十曲	運		及	
鎖業	月二	鑛業	男		丰	力及		_	四業		乘	第一	
未及	關	来	21		告	ナ有		及			用	二十	
及治	7	及冶	人力		セザ	ラ業ザ者		海	ヲ第		馬	7	
金	in	金	力		リレ	ルコルニ	10		除二		車	除	
業	業	業	車	計		者シ	業	軍	2+	業	業	2	
-	順	-	輓										
惠	順次	染	及乘										
農業	之	物	用	六.四	h.	CO	*	二九九八	t	pq	八	P4	
10	=	10	馬	九	九・五		H.	九	七三九	二十六	六六	主	
牧	次	其	車	九	Ħ.	A.		1	九	15	1	九	
啬	*"	1	業										
茶	テ	準	最	六 〇	六二·	三七	四三二		h	10.0		- 1-	
智	縋	備	多	九	*	pu	•	1	六九	ó	1	六・五	
養蠶等並	比	MB	7	16	/	8:4		1	16	0	1	AL	
並	例ョ	潤色	商		.1.	ħ.	Ħi.		L	tret	八	pg	
=	y	並	開業	四	O	Ti	九	九	七	-	六	-	
林	3	34	-	六四·二	i	÷	九九九	二九九八	六		六八	Ô	
業	7	晒				_							
及	女	,	農業、										
狩獵	25	練	未		Ξ		u-de regit						
SHEC	-10	業	牧	七	•	主	五四	六·六	Ŧi.		七十六	=-	
-	木竹	-	在	pu		_	24	75	九	t	15		
商	類	飲	,										
業	934	食	養	=======================================	PM	Ξ 	三八		三八	11.O	Pu	七	
等	關	料	型	六	三九	32	=	0	-	ċ	九	九	
Z	7.	in I	等	/	16.	.11.		0			16	^	
等之二次グ之二	N	及	並				_	-					
火	製	嗜好	二林	二六九	三八・三	二四六	二九	二〇八	二九。三	1111-11	七	=	
4	造業	好品	**	'n	=	六	•	六	=	=	七六	+	
=	業	製	及										
Fre	JEL.	at.	处										

多ク女ハ「無職業及職業ヲ申告セザル者」最多ク「教育ニ關スル業」、「公務及自由業」、「漁業及製鹽業」、 實ニ比スレバ率多ク男ハ四分ノ一强、女ハニ分ノ一强ニ達シ男ハ「石炭及石油採取及精製業」最多ク之 二次グハ「無職業及職業ヲ申告セザル者」、「銅版、石版、木版等ノ彫刻、印刷及寫真業」ニシテ總比例ヨリ シ最少キハ男ハ「現役陸軍及海軍」女ハ「交通業」ナリ次ニ無職家族ハ有業者ヨリ其ノ比少キモ全國ノ事 商業」順次之二次ギ總比例ョリ多シ之二反シ最少キハ男ハ「船舶運輸業」及「飲食料品及嗜好品製造業 最

〇矢田·本邦編死亡者/統計的調查

八	七	大	Ŧ,	四	H	=		Q	九	八	七	六	Ŧ,	pu _j	三	=	-	
商			土	被	飲	木	紙	染	綿、	化	機	金	土	石	鱵	流	農業	
	仙	刻版、 印石	木	服及身一廻り品製	食料品	竹類二	皮革、	物其ノ準	絲織	學的製	械器	=	石類ノ	炭及石	業及冶	業	*、牧	
	,	刷版、及木	建	造	及嗜好	調ス	護謨ニ関	华備、潤色	物、編物等	品及類	具	関ス	採取	油ノ採り	金業(第	及製	養蠶等並	
	I	寫版	築	洗濯、湯熨斗	品製造	ル製造	スル製造	」並ニ陋、練	等ノ製造	似品製造	製造	ル製造	及製造	取及精製	四ヲ除	驗	二林業及狩	
業	業	業ノ	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	業	2	業	優	
八四·四	1111-0	=0.	六六•七	四九・〇	六六・二	六O·O	四四十二	六八・五	五六・〇	*0	三八・三	四三	五一	一八二	六八・九	六〇・三	七四男四	有
七七七五	二六十二	一八二	1	六四·七		一三〇九	七六·九	七一・六	0-1111	10.	六八・六	四二〇	= <u>H</u>	K	00.00	十二二十七	八六十一	業者
八三十六	111111111111111111111111111111111111111	三〇九	六六·七	五三	大三・〇	大二-二	四七一	六八·九	四〇八八	五二四四	三八・八	四三三	五〇・四	五	七一六	六二・三	七七十六六	
一五九	二九九	九.九	一〇.六	一-七	九八八	一九	111-11	一三九		五七	一二-七	二二六	-	111-111111	四九	六七	九男	無
三四。七	二六十七	30·M	二九。五	二八、四	二九。七	110.11	三三一八	三三九	二五·七	1111-111			110.1	一六十七	四十六	三七・七	三五女四	業家族
二六九	二〇九	二五十六	二二八	 	=======================================	ニニ・六	三四七	三五三	三〇八	h.	110.4	二一九	0-1111	一九一六	<u></u> 五。	二五:二	八計四	

第十 癌死亡者 / 月別

死亡者ノ各月二於ケル狀況ヲ示サム。 ノ死亡數ヲ算出シ全年ノ平均一日ノ死亡數ニ對スル各月平均一日ノ死亡數ノ關係數)ノ平均ヲ揚ゲ癌 左ニ最近五箇年ノ癌死亡者一年平均一日死亡千ニ付各月平均一日死亡數(各月ト全年トノ平均一日

	九九七・四	九九五·九	九九八、九	十一月
	一一五九		11 11 11	十月
	一四〇八	一三九九八	四九	九月
(1)	1 110			八月
	一〇八二・七	一〇八四・五	· ○入一· ○	七月
	011110	〇一八。四	一〇〇七八	六月
	九七〇・六	九六〇・三	九八〇・六	五月
(+) —=: <u>*</u> ±	九〇五	九一六・九	九〇四。四	四月
	九一六•八	九二十六	九二二	三月
(+)	八八七。四	ススス・ニ	八八六、五	月
(十) 二五:	八九七•六	九〇三	八八五:二	月
多(+)少(二)男ニ對スル女!	ät	女	男	

ニシテ女ハ「鑛業及冶金業」ナリ。

死亡者ト職業トノ關係ヲ知ル能ハザルハ勿論ナリト雖其ノ多少ヲ觀察スルニ際シ左ノ事項ヲ推測スル ケレバ其ノ比例數多ク之ニ反シ癌死亡多クトモ總死亡多ケレバ其ノ比例數少キガ故ニ此ノ數ヲ以テ癌 以上二表ハ總死亡數ニ對スル癌死亡!比例數ニシテ假令同職業者ニ對スル癌死亡少クトモ總死亡少

キ為ナラムカ 「商業」、「公務及自由業」及「無職業及職業ヲ申告セザル者」多キハ比較的安逸ナル生活ヲ爲ス者多

二、「人力車挽及乗用馬車業」多キハ交通機關ノ發達セル今日ニ於テ尚人力車挽ヲ繼續スル者ハ年長者 多キ為ナラムカ

飲食料品及嗜好品製造業」多キハ常二胃腸ヲ損スル者多キ為ナラムカ。

四、 Ŧi, 「化學的製品及類似品製造業」多キハ諸種ノ樂物的刺戟ヲ受クルコト多キ為ナラムカ 「現役陸軍及海軍」少キハ未ダ癌ノ多發年齡ニ達セザル者多キ為ナラムカ之ニ反シ其ノ無業家族ニ

多キハ主ニ將校ノ家族ニ屬シ成年者以上ヲ包含スルコト多キノミナラズ比較的生活程度ノ良好ナル 基因スルモノナラムカ。

六、「鑛業及冶金業」及「石炭及石油ノ 採取及精製業」少キハ癌ノ多發年齢ニ達セザル 者多キ為ナラム

「鑛業及冶金業」、「漁業及製鹽業」、「土石類ノ採取及製造業」、「化學的製品及類似品製造業」ノ無業

比例ハ甚シキ増減ナキニ對シ全死亡者ハ稍~顯著ノ高低アルニ因ルナルベシ

六月 三七・一			月	三月二九一		一月 二七九	男	
三六・一		三六十一	三二九	二九・六	二七九	二九〇	女	第四○表
	三六・三	三六十六	三二七	二九。四	二七十六	二八。四	at	月別總死亡二對
	全年	十二月	十月	十月	九月	八月		スル癌
	1111110	11 · 11	三班	三八。四	三六二	三三十六	男	死亡比例 千分
	三二十七		三 五 二	三七·三	三四十六	H -11	女	比)表 (額
	111-4		Th.	三七十	三五	三二.四	計	大正元年

第一概括

國二於ケル癌死亡者ノ統計ノ概略ハ左ノ如シ 內閣統計局編纂ノ死因統計及動態統計書二據リ本邦癌死亡者ノ統計的調查ヲ行ヘル成績ノ概要及外

之二十歳以上ノ者ノミニ付其ノ序列ヲ求ムレバ第四位(第一位結核、第二位脳出血及脳軟化、第三位 第五位腦出血及腦軟化、第六位老衰、第七位畸形、第八位胃ノ疾患)ノ約三分ノーニ達ス(第一表)加 多キコト第九位ヲ占メ第一位タル結核(第二位下痢及腸炎、第三位肺炎及氣管枝肺炎、第四位腦膜炎、 正元年ョリ大正五年ニ至ル五箇年ヲ謂フ以下皆同ジ)ノ平均ニ依レバ癌死亡者ハ全死亡者ノ病類中 大正五年ニ於ケル本邦ノ癌死亡者ハ總數三萬八千三百十五名ニシテ最近五箇年(明治四十五年、大

O矢田·本邦攝死亡者/統計的調查

00000 100000 100000

死亡の研究」ニ於ラ明治三十二年以降同四十四年ニ至ル事實ニ付詳細ノ研究成績ヲ發表 月ニ於テ僅 達シ爾後逐次下降ス女モ亦二乃至四月ニ於ラ多少ノ増減アルノ外、同一ノ狀況ヲ呈シ總數 月二於ラ女ノ少キヲ除クノ外、常二女二多ク八月以降ハ常二男二多シ。 ノ説明ニ 月ニ位シ彼ノ後山ト時ヲ同フスルヲ見ル此ノ差異ノ原因ハ其ノ詳細ヲ知ル能ハズト難、 月を絶底ごす」ト今上表ノ事質ヲ之ト對照スルニ癌死亡者ハ一山ヲ形成スルノミニシテ其 を頂巓ごし後山は高く八月又は九月を頂巓ごす又前谷は深く五月又は六月を絶底ごし後谷は淺く十 關係數ニ依リ「本邦の月別比例を曲線に描けば二山こ二谷こを有するを見る而して其前山は低く二月 傳染病及風土病等ノ影響ヲ受クルコト大ニ少キ為ナラン次ニ男女ノ較差ハ一月乃至七月ハ五 據ル自然的關係殊二氣候ノ影響ヲ受クルコト少ナク又社會的關係即チ生產數、 據レバ男へ四月ニ於ラ少シク前月ヨリ減少スルノ外、月ト共ニ漸次增多シ九月ニ於ラ頂點ニ 二下降スルヲ異ニスルノミ要スルニ夏秋ニ多ク冬春ニ少シ二階堂統計官ハ「本邦人の月別 乳兒死亡及小 癌八同統計官 セラレ上記 ノ頂巓ハ九 ニ於テハニ

鎮トシ後山小高ク十月ヲ頂鎮トス又前谷ハ深クシテ二月ヲ絕底トシ後谷ハ淺クシテ八月ヲ絕底トナス 其 今之ヲ前記ノ全死亡者ノ月別比例ノ曲線ト對比スルニ殆ド正反對ノ現象ヲ呈ス是レ癌ノ平均一日死亡 ノ成績左 以下更二各月 ブ加 クニシテ此 こ於ケル全死亡者中癌死亡ハ其ノ幾何ヲ占ムルヤヲ最近五箇年ノ事實ニ付調査スルニ・ 一ノ比例ヲ曲線ニ描ケバニ山トニ谷トヲ形成スルヲ見、 前山ハ 低 五月ヲ頂

リニ・三多シ (第七、 リ少ク同五年ノ如キハ其ノ差三・一ヲ占ム然レドモ明治三十九年以降ノ 總平均ハ 尚都市ニ於テ鄙ヨ 治四十四年ヲ頂巓トシ爾後漸次減少シ大正四年ニ於テ僅ニ增加セルノミニシテ大正二年以降ハ鄙 多ク明治三十九年ノ如キハ其ノ差十萬比七•三ニ達ス而シテ 全國ノ事實ト等シク 追年増加セルモ明 第八表)

セ 亞米利加外四箇國ノ主要都市ニ於ケル癌死亡人口比モ追年增加シ三十餘年ニシテ五分ノ四內外ヲ増 ルモノアルヲ見ル例之が英國ノ十都會ハ一八八一年二於テ十萬比五七。三ナリシモノ一九一二年

ハ一〇六・九トナレリ(第九表)。

テ本死亡比例ハ尚彼レヨリ多シ(第一二表) ノ減少ト共二大正二年以降ハ却ラ一般ニ遞減セリ、サレド都市ノ總死亡率ハ全國ノ率ヨリ少キヲ以 比例多ク彼レノ一倍半ニモ達セルコトアリ然レドモ増加率ハ彼レノ如ク著明ナラズシテ人口比例 總死亡者ニ對スル癌死亡比ハ二〇乃至三四%ニシテ前記ノ如ク人口比例ノ増加ト等シク追年増加 大正五年へ明治三十二年ニ比シー倍半强トナレリ (第一一表) 都市ノミノ狀況へ全國ニ比シ常

二多カリシモ爾後ハ却テ男ニ於テ○•一乃至○•三多キコト多ク總死亡數ニ對スル比モ明治三十二乃 至三十六年及四十年ニ於テ千分比○・一乃至○•八女ニ多カリシノ外、男ニ於テ○・一乃至一・○多シ (第一三表)但シ都市ノミノ男女別人口比例ハ常ニ女ニ多ク其ノ差モ稍~大ニシテ明治四十一年ノ 癌死亡者ノ男女別人口比例へ明治三十二乃至三十五年ニ於テハ女ハ男ニ比シ一萬比○・一乃至○・ ハ一萬比一・一二達セルヲ見ル要スルニ全國ノ男女別人口比例ハ 僅二男ニ多ク 之ニ反シ都市ノミ

老衰)ニ上昇シ殊ニ成年以上者ニ其ノ惨害ヲ與フルコト甚シキヲ知ル(第二表)。

二、各國ノ癌死亡者中一九〇八乃至一二年ノ平均ニ依レバ本邦ノ 癌死亡者ハ 人口十萬比六三・二ニシ ラ二十四箇國中少キモノニ屬シ多キコト第十八位ヲ占メ最多タル瑞西(一二四・三)ノ約二分ノ一、最

少タル智利(三五・六)ノニ倍弱ヲ占ム(第三表)。

分ノ二、最少タルカルカッタ(一一・七)ノ約六倍ナリ(第四表)。 少キモノニ属シ多キコト第二十及第二十一位ヲ占メ最多タルコンペンハーゲン (一六一•三) ノ約五 各國主要都市ノ癌死亡者中同上平均ノ東京ハ人口十萬比六四・八大阪ハ六一・ニニシラニ十四都市中

三、本邦ノ癌死亡者へ明治四十三年及大正元年ニ於テ僅ニ前年ヨリ少キノ外、年ト共ニ増加シ明治三 如キハ一九○○年ニ於テ八二・九ナリシモノ一九一三年ニハ一○五・五トナレリ (第六表)又蘇格蘭 アルハ勿論ナリトス、サレド醫術ノ進步ハ一方此ノ死亡者ノ減少ヲ來タスベキニ拘ラズ尚且增加ス 此ノ増加ノ原因ハ茲ニ之ヲ説明シ能ハザルモ醫術ノ進歩ハ其ノ診定ノ漸次正確トナリシコト與テ力 十二年ニ於テ人口十萬比四二•九ナリシモノ大正五年ニハ六九•四ニシテー倍半强トナレリ (第五表) 一八九六乃至一九〇〇年ノ五年平均七七・一ナリシモノ一九〇六乃至一〇年ノ平均ニハ九九・七二增 一ニシ九箇國ノ一九○○乃至一三年ノ調査ニ於テ瑞西ヲ除クノ外、共ニ增加シ英虞蘭及威爾斯 、之ヲ診斷ノ正鵠ニノミ歸シ能ハザルガ如シ加之此ノ増加ハ獨リ本邦ノミナラズ各國共ニ其ノ軌 セルヲ見ル(第一〇表)。

本邦ノ人口五萬以上ノ都市(以下之ヲ單ニ都市ト略稱ス)ノミノ癌死亡人口比例ハ鄙從ラ全國ヨリ

別人口 ニモ注意セザルベカラズ是レ本症ハ年齢ト大關係ヲ有スレバナリ(第一九表)。

本邦ノ病理解剖及患者ニ就キテノニ、三ノ統計ハ共ニ男ニ多ク且女トノ差モ大ナリ之ニ反シ外國

レモ

歲就中五十五乃至六十五歲二於テ多ク其ノ後年齡ノ增加ト共二少ク女ハ男二比シ五歲早年年齡二於 ラ 報告ハ何 增 於テ特ニ多ク爾後年齡ノ增加ト共ニ減少シ女ハ三十歲以上ニ於テ頓ニ增加シ殊ニ四十五乃至七十 死亡者ト異ナリ十歳以下ニ於テ全ク之ヲ見ザルノミナラズ之ヨリ以上三十五歳迄 癌死亡者ノ明治三十九年ヨリ大正四年ニ至ル十一筒年間ノ平均ニ依ル年齢別人口(年齢構成)ハ一 二遞加 减 スルヲ見ル IV モ甚少ク男、三十五歲以上ニ至リテ頓ニ增加シ五十乃至七十歲就中六十乃至六十五歲 女二多シ。 (第二〇表)。 ハ年齢ノ増加

於テ既二大二 年 十五歲以 女ハ生殖器及乳房ノ男ト異ナレル點ハ與ラカアルモノナルベシ又前後兩囘 後二於ケル下降モ 間 シ女ハ前記 二四十五 明治四十一及大正二年末調查ノ靜態統計二依ル年齡別人口ヲ中心人口ト假定シ各其ノ前後五箇 ノ癌死亡者年齢別人口比例ヲポムルニ兩囘ノ調査トモ十五歳以上年齢ノ進 上ヲ除クノ外、 歳以上二於テ頓ニ 増加シ其ノ頂巓ハ等シク六十乃至八十歳ニアル 小男ノ 如ク急速ナラズシテ階段狀ヲ呈ス是等ノ原因ハ茲ニ之ヲ説明シ能 殆ド何 増加シ V ノ年齢二於テモ前五年二比シ増加セルヲ見ル 爾後漸次上昇シテ六十乃至八十歲二於テ頂點二達シ次デ モ男ノ如ク急峻ナル ノ調査ニ於テ後五年ハ九 (第二一表)。 ムト共ニ 增加 7 見 遞加 ズ且其 ハザル 漸次下

平均上男ハ都ョリ鄙ニ多キコニー萬比○・二五女ハ鄙ョリ都ニ多キコト○・七六三達ス又都市ハ男ョ 下及五十歲以上ノ者少シ(第一七表)故二明治四十年ョリ大正四年二至ル事實二付癌死亡ナキ十五歲 上記ノ如ク癌死亡者ノ男女別人口比例都ハ男ヨリ女多ク部ハ女ヨリ男多キハ其ノ理由何レニアリヤ リ女多々鄙ハ女ヨリ男多々其ノ差十一箇年ノ平均上甲ハ○•七七乙ハ○•二四ナルヲ見ル(第一六表) 以下ノ人口ヲ除キ其ノ比例ヲポムレパ男モ女ト等シク都ニ多キヲ見ル、 民ノ年齢別人口ノ差異ニ基ク結果ナリト謂フベキカ然リ而シテ都市ノ鄙ニ比シ多キハ其ノ原因何レ = 稍~女ニ多シ(第一四、第一五表)今都市ヲ鄙ト對照スルニ其ノ成績亦之ト同一ニシテ十一箇年ノ 注意セザルベカラズ然ルニ警察署ノ調査ニ係ル都鄙別年齢別人口ニ依レバ都ハ鄙ニ比シ十五歳以 アリャ職業、 之ヲ説明シ能ハザルモ本症ノ如キ年齢ト大關係ヲ有スルモノニ在リテハ其ノ住民ノ年齢別人口 生活狀態ノ差異等與ラカアルベシト難診斷ノ確否モ亦其ノ一因ヲ爲スモノナランカ サレバ上記ノ成績ハ都鄙住

國ハ女二於テ殊二多クハワリヤ、英虞蘭及威爾斯、 於テ僅ニ多キモウルグァイハ殊ニ男ニ於テ 多ク瑞西、墺地利順次之ニ次ギ テ男ニ多シ之ニ反シ合衆 都市二於テハ皆女二多シ故二癌死亡者ノ人口比ハ國二依リ男二多キモノアルモ古來唱道セラル、ガ 來研究ノ價値アル問題トス之ガ為二ハ各國ノ人種、 如ク概シテ女ニ多キヲ例トスト謂フベシ而シテ國ニ依り敍上ノ如キ差アルハ興味アル事項ニシテ將 主ニー九○八乃至一二年ノ事實ニ付各國ニ於ケル男女ノ人口比例ヲ比較スルニ日本及和蘭ハ男ニ 伊太利、愛蘭順次之二次ギテ女二多クニ、三ノ 氣候、風土及生活狀態等ノ外、 國民ノ男女別年

ナ 要スルニ都ハ鄙ニ比シ癌多發年齢ニ於ケル癌死亡者ノ人口比例多ク又鄙ハ男多キニ拘ラズ都ハ女 ルモ十五歳以上ノ者ニ對スル比例ハ之ヨリ少シ是レ年齡別人口ノ都鄙ニ於テ差アルニ基クモノト · 女二於ラ男ヨリ多ク本籍人口ヨリ算出セル成績ト符合ス而シラ總數二對スル比例 原因ハ職業及生活狀態等ニ歸スベキカ將來研究スベキ問題ナリトス(第二五表)。

Ŧi, 位ハ皆女ニ於テ少シ要スルニ男ハ「胃及肝臓」、「食道」「腹膜、腸及直腸」、「口腔」、「皮膚」ノ順序ニシテ女 多ク之二次グハ「食道ニシテ「腹膜、 除外セバ女ハ總テ男ヨリモ少ク唯腹膜、 「生殖器|及「乳房」ノ癌ハ甚ダ多クシテ「生殖器」ハ「胃及肝臓」ヨリ稍ト少キノミ然レドモ其ノ他 女ハ『胃及肝臓』ニ於テ最多シト雖其ノ率男ニ比シ大ニ少ク約五分ノニニ過ギズ之ニ反シ女子固有 殖器」及「胃及肝臓」ニ於ラ殊ニ多シ是等ハ其ノ原因何レニアリヤ大ニ 興味アル 問題ナリトス (第二 ヘ「胃及肝臓」、「生殖器」、「腹膜、腸及直腸」、「乳房」、「口腔」、「皮膚」ノ順序ヲナシ「生殖器」及「乳房」ヲ ハ「口腔」及「食道」僅ニ多キモ「胃及肝臓」ニ於テ少シ之ニ反シ女ハ何レノ部位ニ於テモ鄙ヨリ多ク 最近五箇年ノ事實ニ付癌死亡者ノ罹患部位ヲ調査スルニ人口比例上都鄙共ニ男ハ「胃及肝臓」最 |殖器||及「胃及肝臓」ニ於テ然リ要スルニ都ハ鄙ニ比シ男ハ「胃及肝臓」ニ於テ殊ニ少ク女ハ「生 腸及直腸」之二次ギ「爾他ノ臟器」及「口腔」順次之二次グ然ルニ 腸及直腸」二於テ殆ド同數ナルノミ而シテ都ハ鄙ニ比シ男

上記 夕「胃及肝臓」ハ男ニ於ラハ 約七六%女ニ 於ラハ 約五○%ヲ占メ「婦人生殖器」ハ 女ノ約三三%ヲ占 / 部位別ヲ百分比トナストキハ男女共ニ生命上貴要ニシテ而モ手術ノ效果不充分ナル臓器最多

一一、主ニー九〇八乃至一二年ノ各國ニ於ケル年齡別調査モ大差ナク何レモ男女共ニ四十五歳以上ニ 於テ頓ニ增加シ六十五歲以上ニ於テ頂點ヲ示シ本邦ノ事實ト等シク女ハ男ニ比シ早クヨリ死亡率加 ハリ三十五乃至四十四歳ニ於テ殆ド男ノ倍數トナルヲ見、六十五歳以上ニ於ラハ却ラ男ヨリ少キ國

歳早々三十歳ニ至リテ頓ニ增加シ男ハ五十乃至六十五就中五十五乃至六十歳女ハ四十五乃至六十五 男ハ二十歳以下女ハ三十歳以下二於テ少キノ外各年齡二於テ其ノ率多シ殊二女二於テ其ノ差ノ大ナ 就中五十乃至五十五歳ニ於テ最多々爾後ハ殆ド年ト共ニ滅ズ都市ノミノ狀況モ亦之ト同一ナリト雖 七 ルヲ見ル(第二三表)。 ルニ十歳以下ニ於テハ全ク之ヲ見ザルモ爾後年齢ノ増加ト共ニ遞加シ男ハ三十五歳女ハ之ヨリ五 明治三十九年乃至大正四年ノ事實ニ付同一年齡ノ全死亡者中其ノ幾何ガ癌死亡者ナリャヲ調査

一三、同上期間ノ事實ニ付全癌死亡者ニ對シ各年齢別比例ハ都市ト鄙トニ於ラ如何ナル差ヲ有セリヤ 以上二於テ鄙ヨリ少シ此ノ現象ハ都市ノ 住民ハ 鄙ニ比シ 少年及高年者少キニ基ク モノトス セルニ男女共二都市ハ二十乃至六十歲二於ラ其ノ比、 鄙ョリ多ク十五乃至二十歲及六十五歲

四、警察署ノ調査ニ係ル大正二年末現在人口ニ依リ之ヲ中心人口ト假定シ其ノ前後五年間 年齡別人口癌死亡比例ヲ調査セルニ都ハ鄙ニ比シ男ノ十五乃至二十歳及九十歳以上、女ノ十五乃至 二十歳ニ於テ少キノ外、各年齢ニ於テ其ノ比例多シ然レドモ男女ノ關係ハ鄙ハ男ニ於テ女ヨリ多ク

四表)。

比例ヲ調査セルニ各部位共ニ六十歳以上ハ十五乃至六十歳ニ比シ甚多々七、八倍乃至十倍ニ達ス然 獨リ「婦人生殖器」ハ約二倍ヲ占ムルノミ是レ婦人生殖器ノ癌腫ハ比較的弱年者ニ來リ月經閉止

期二多キ結果ナルベシ(第三一表)。

一八、前項ノ部位別年齢別ヲ現住人口ノ年齢別ニ依リ都鄙ニ分チ其ノ差ヲ調査セルニ都ハ何レノ年齢 何レノ部位ニ於テモ鄙ヨリ多シ殊ニ六十歳以上ニ於テ其ノ差大ナリ且「生殖器」ハ鄙ノ約二倍ナルニ

一九、各府縣ニ於ケル癌死亡者ノ人口比例ハ年ニ依リ多少ノ差ァリト雖殆ト皆年ト共ニ増加シ近時ハ 明治 縣ニ於テ最少ク一萬比三・五二ニシテ奈良縣ニ於テ最多ク全國ノ平均六⋅四四ニ對シー一・七○ニ達ス 三十二年乃至三十六年ニ比シ三分ノ一乃至二分ノーヲ加ヘタリ最近十年間ノ平均ニ據レバ沖繩 へ約三倍ナルヲ見ル(第三二表)。

ithi シテ全國ノ狀況ヲ通覧スルニ左ノ四箇ノ多發地方アルヲ知ル 奈良縣ヲ中心トシ南ハ和歌山縣、北ハ京都府、 滋賀縣、東ハ三重縣、西ハ大阪府ノ一團

佐賀縣ヲ基點トシ之ヨリ東北ニ向フ福尚縣、 山口縣、 島根縣ニ至ルー側

二、新潟縣、山形縣、宮城縣ノ一團。

四、孤立的ナルモ干葉縣

又全國ヲ十一統計區ニ分チタル區分ニ依レバ近畿區ニ於テ最多ク八•三八ニ 達ス是レ 前記ノ第一多

發地ヲ包含スルニ依ル(第三三表)。

〇矢田·本邦癌死亡者/統計的調查

各府縣最近五箇年ノ總死亡及癌死亡人口比例ヲ調査セルニ兩者ノ相一致セルヲ見ズ從テ癌死亡

ム (第二七表)

佐藤博士及外二氏ノ患者ニ就キテノ前分類ニ依ル部位別モ「胃及肝臓」第一位ヲ占メ「婦人生殖器」第 二位ニアリ之ニ次グハ「腹膜、腸及直腸」、「乳房」、「口腔」、「皮膚」ニシテ前記ノ死者ニ於テ第三位ヲ占

ムル「食道」、第七位ニアリ(第二八表)

山極博士及外二氏ノ病理解剖ニ就キテノ前分類ニ依ル部位別モ 胃及肝臓」第一位ヲ占メ「儞他ノ臓 房」、「皮膚」及「口腔」ニ少キハ死亡者ノ統計ト一致スル所ナリ(第二九表) 器」之二次ギ他ハ腹膜、 腸及直腸、「婦人生殖器、「食道」、「口腔」、皮膚、、乳房」ノ順序ニシラ「乳

以上ニ依り本邦ニ於ケル癌腫ハ「胃及肝臟」(胃癌其ノ主タルモノタルハ勿論ナリトス)ニ於テ第一位 ヲ占メ之ニ次グハ「婦人生殖器」ニシテ「腹膜、腸及直腸」、「食道」等之ニ 次ギ 乳房」、「口腔」、「皮膚

等二於テハ少キモノト謂フヲ得ンカ。

一六、主ニー九○八乃至一二年ノ各國ニ於ケル癌死亡者ノ罹患部位ヲ調査セルニ各國共ニ多少ノ差ア 中中數位ニアリラ男ハ少キ國ノ第七位、女ハ同ジク第六位ヲ占メ生殖器モ中數位ニアリラ同ジク第 等シク「胃及肝臓」ニ多ク「生殖器」之ニ次ギ第三位ハ「乳房」又ハ「腹膜、腸及商腸」ニシラ「皮膚」又ハ ルモ男ハ「胃及肝臓」最多々「腹膜、腸及直腸」之ニ次ギ「口腔」、「皮膚」順次之ニ次グト謂ヒ得ベク女ハ 七位ニアリ (第三〇表) [腔.之ニ次グト謂フベク本邦癌死亡者ノ部位別ニ 特異點アルヲ見ズ 且最多キ「胃及肝臓」ハ十箇國

一七、大正二年末ノ年齡別人口ヲ中心人口ト假定シ其ノ前後五箇年ノ癌死亡者罹患部位別年齡別人口

「公務及自由業」ナリ之ニ反シ最少キハ男女共ニ「農業、牧畜、養蠶等竝ニ林業及狩獵」ニシテ「鑛業及

冶金業」之二次が(第三七表)。

家族ハ有業者ヨリ其ノ比少キモ全國ノ事實ニ比スレバ率多ク男ハ四分ノ一强、女ハ二分ノ一强ニ達 最多ク「漁業及製鹽業」之ニ次グ之ニ反シ最少キハ男ハ「現役陸軍及海軍」女ハ「交通業」ナリ次ニ無業 都市ノミノ有業者男ハ「人力車挽及乗用馬車業」最多ク「商業」之ニ次ギ女ハ「木竹類ニ關スル製造業」 シ男ハ「石炭及石油採取及精製業」女ハ「無職業及職業ヲ申吿セザル者」最多ク男ハ「船舶運輸業」女ハ 鑛業及冶金業 最少シ(第三八表)。

係ヲ知ル能ハザルモ其ノ多少ヲ觀察スルニ際シ左ノ事項ヲ推測スルヲ得ムカ。 多々之二反シ癌死亡多クトモ總死亡多ケレバ其ノ數少キガ故二此ノ數ヲ以テ癌死亡者ト職業トノ關 以上ノ成績ハ比例数ナルヲ以テ假合同職業者ニ對スル癌死亡少クトモ總死亡數少ケレバ其ノ比例數

一、「商業」、「公務及自由業」及「無職業及職業ヲ申告セザル者」多キハ 比較的安逸ナル 生活ヲ爲ス者 多キ為ナラムカ

二、「人力車挽及乗用馬車業」多キハ交通機關ノ發達セル今日ニ於テ尚人力車挽ヲ機續スル者ハ年長 者多キ為ナラムカ。

三、「飲食料品及嗜好品製造業」多キハ常ニ胃腸ヲ損スル者多キ為ナランカ。

四、「現役陸軍及海軍」少キハ未ダ多發年齡 ハ主ニ將校ノ家族ニ属シ成年者以上ヲ包含スルコト多キノミナラズ比較的生活程度ノ良好ナル = 達セザル者多キ為ナラムカ之二反シ其ノ無業家族二多

〇矢田·本邦癌死亡者 / 統計的調查

六一・一%二達ス沖繩縣ハ總死亡率少キ為却テ此ノ比多ク青森縣二於テ最少キ(一九・二%)ヲ見ル 者ノ總死亡者ニ對スル比ハ癌死亡多キ地方ニ於テ多ク奈良縣ヲ 第一トシ全國ノ 平均三二・九ニ對シ

一一、都市ノ癌死亡者人口比例モ府縣ノ如ク年ト共ニ其ノ數ヲ増セルモ彼レノ如ク顯著ナラズシテ大 ク三・一三ニシテ最多ノ約四分ノーニ過ギザルナリ(第三五表)。 正五年ノ如キハ寧ロ前年ヨリ減少セルモノアリ最近十年間ノ平均二據レバ金澤市及新潟市二於ラ特 多ク全都市ノ平均一萬比六•六七ニ對シー一•四一乃至一一•四五ニァリ 之ニ反シ 佐世保市ハ最少

二二、都市最近五箇年ノ總死亡及癌死亡人口比例ヲ調査セル成績ハ癌死亡者ノ總死亡者ニ對スル比例 ク四八・一%ニ達ス(第三六表)。 ノ平均三五・五ニ對シ四六・一乃至四七・九‰ナリ然レドモ福岡市ハ總死亡少キ 為此ノ 比例比較的多 ノ狀況等ハ府縣別ト同一ノ關係ニアルヲ見、癌死亡多キ新潟、金澤兩市ノ如キハ其ノ比多ク全都市

三二、最近五箇年ノ事實ニ付同一職業ノ死亡者中其ノ幾何ガ癌死亡者ナリヤヲ調査セルニ有業者 ヲ占ム而シテ男女共ニ「無職業及職業ヲ申告セザル者」最多ク之ニ次グハ男ハ「現役陸軍及海軍」女ハ 軍及海軍」、「鑛業及冶金業」女ハ「綿、絲、織物、編物等ノ製造業」、「其ノ他ノ工業」ナリ次ニ無職家族 及身ノ廻リ品製造、洗濯、湯熨斗業」、「木竹類ニ關スル製造業」ナリ之ニ反シ最少キハ男ハ「現役陸 女共ニ「商業」最多ク男ハ之ニ次グハ「人力車挽及乗用馬車業」「飲食料品及嗜好品製造業」女ハ「被服 ハ多クハ幼年者ヲ包含スルガ爲其ノ比例少ク男ハ有業者ノ約七分ノー、女ハ幼年者少キ爲五分ノ三

や將タ又他ニ理由アリヤ。

二、都 ルヤ將タ職業、生活狀態等ノ差ニ基クヤ或ハ他ニ理由アリヤ。 ハ鄙ニ比シ死亡數多シ之レ 一部住民ノ年齢別人口ノ差ニ基クモ都ニ多キハ診斷ノ正 確ナルニ依

三、癌ハ一般ニ女ニ多シトスルヲ例トスルニ拘ラズ明治三十八年以降ハ男ニ於テ女ヨリ僅ニ多シ之ニ 態等ノ差ニ依ルヤ或ハ他ニ原因アリヤ。 反シ都ハ常ニ女ニ多ク男トノ差モ稍、大ナリ之レ一部住民ノ年齢別人口ノ差ニ基クモ職業、 生活狀

四 原因何レニアリヤ又「婦人生殖器」ノ六十歳以上ハ十五乃至六十歳ニ比シ鄙ハ約二倍ナルニ對シ都 三倍ナリ其ノ原因何レニアリヤ。 癌死亡者ノ罹患部位中鄙ハ都ニ比シ特ニ男ノ「胃及肝臟」多ク女ノ「生殖器」及「胃及肝臟」少シ其

Ŧi. 癌死亡者ハ府縣中近畿區殊ニ奈良縣ニ甚ダ多ク都市中金澤及新潟市ニ特ニ多シ其ノ原因何レニ

女ニ在リテハ結婚及妊娠ノ關係、 Æ 3 調製シ少クトモ患者ノ住所、 以上列撃セル事項ノ原因ハ余ノ淺學到底之ヲ説明スルヲ得ズーニ諸賢ノ高教ヲ乞ハントス然レドモ ノナレバナリ。 研究ニ對シテハ一定ノ學識アル醫師ニ於テ臨時脚氣病調查會ニ於ケル脚氣調査票ノ如キモノヲ 方面 ノ研究ト比較對照スルヲ必要ナリト認ム是レ本症ハ上記ノ諸點ト若干ノ關係ヲ有スル 年齡、性、職業、 發病時、罹患部位、 生活狀態、 治療法、 嗜好品、 經過及轉歸等ヲ明ニシテ之ヲ綜合研究 遺傳、 血族ノ關係、 既往症、誘因

二基クモノナラムカ。

五、「鑛業及冶金業」少キハ前項ト同一ナラムカ。

" 差異!原因ハ之ヲ説明シ能ハザルモ癌ハ二階堂統計官ノ説明ニ據ル自然的關係殊ニ氣候ノ影響ヲ受 ス女モ亦二乃至四月ニ於テ多少ノ增減アルノ外、同一ノ狀況ヲ呈シ總数ニ於テハ二月ニ於テ僅ニ下 四月二於テ少シク前月ヨリ減少スルノ外、 コト大ニ少キ為ナラン(第三九表)。 ルコト少ナク又社會的關係即チ生產數、乳兒死亡及小兒死亡,傳染病及風土病等ノ影響ヲ受クル スルヲ異ニスルノミ而シテ之ヲ全死亡者ノ狀況ト比較スルニ冬期ニ於ケル増多ヲ見ザルナリ此 最近五箇年ノ事實ニ付癌死亡者一年平均一日死亡千二付各月平均一日死亡數ヲ調査セルニ男ハ 月ト共ニ漸次增多シ九月ニ於テ頂點ニ達シ爾後逐次下降

亡比例ハ甚シキ墳減ナキニ對シ全死亡者ハ稍~顯著ノ高低アルニ因ルナルベシ (第四○表)。 八月)トラ形成シ二階堂統計官ノ全死亡者ニ對スル調査ト殆ト正反對ヲ爲セリ是レ癌ノ平均一日死 同期間ノ全死亡者ニ對スル各月ノ癌死亡比例ハ之ヲ曲線ニ描ケバニ由(五月及十月)トニ谷 (二月及

第二結論

研 究 スペキ 癌死亡者ノ統計的調査成績ハ上記ノ如ク又其ノ概要ハ第一一概括ニ於テ既ニ記述セリ故ニ將來 事項 開リス ル要點ラ楊ゲテ結論トナシ之二卑見ヲ附記セントス。

治療法ノ進歩ニ依ルヤ將タ他ニ理由ノ存スルヤ又全國ノ増加ハ診斷ノ漸次正確トナリシノミニ依ル 全國ノ癌死亡者ハ追年增加セルニ拘ラズ人口五萬以上ノ都市ノ死亡者ハ近時減少ノ 傾向アリ之レ



終り二臨三貴重ナル外國ノ統計書ヲ貸興セラレタル二階堂統計官ニ對シ謹デ感謝ノ意ヲ表ス。

(大正八年十一月二日脫稿)